ウォーシップガンナー艦これ　白鉄の艦隊

タオモン3

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウィルキアの叛乱終結後、ウィルキア王国は戦乱の原因となった超兵器機関を永久封印する為に尽力していたが、各国は強大な武力を手放すことはなかった。この後の時代、各国よりも強力な超兵器を生み出すための開発競争期が十数年間続いていた時、反乱軍――ウィルキア帝国軍の残党は戦死したフリードリヒ・ヴァイセンベルガーを生体ユニットとし、マザーシップ、フィンブルヴィンテルを復活させ、再び世界に宣戦布告した。

各国は再び連合軍結集し、持てる超兵器を投入するが、圧倒的な性能差に艦隊８割を失い、壊滅を免れる為に撤退した。

行く先々を破壊の限りを尽くすヴァイセンベルガーの前にウィルキア王国近衛艦隊司令官長官兼同盟軍艦隊司令官ライナルト・シュルツ大将指揮する独、漆、日、三国同盟軍艦隊が立ちはだかる。戦況は苦戦を強いられるも旗艦シュヴァンフヴィードと８割の犠牲を払いヴァイセンベルガーとフィンブルヴィンテルを海の底に沈めること成功した。

しかし、水底に沈んだシュヴァンフヴィードは艦娘として転生した。

目次

艦娘設定 ―― 1
戦艦シュヴァンフヴィードの帰還 ―― 4
出発 ―― 10
艤装内の巡検、接敵 ―― 16
戦闘 ―― 22
ゲスト ―― 30
動揺 ―― 36
接触1 ―― 42
接触2 ―― 47
単冠湾鎮守府1 ―― 53
単冠湾鎮守府2 ―― 58
単冠湾鎮守府3 ―― 64
疑惑 ―― 69
姉妹 ―― 75
性能 ―― 81
予兆 ―― 86
出撃 ―― 92
払拭への選択 ―― 99

艦娘設定

シュバンフヴィード級戦艦　シュバンフヴィード

ウィルキア王国次期主力戦艦の試作艦。

圧倒的威力を誇った帝国の超兵器であったが従来の戦艦を数十隻の建造できる資材と資金が必要になる。如何に工業国家であってもこの莫大な数字を隠し通すことは不可能と考えたヴァイセンベルガ―はカモフラージュに軍備増強を唱え新造戦艦開発案でシュバンフヴィードは建造され、超兵器機関技術の実証試験も行われ完成する。

日本の大和型戦艦の主砲より巨大な５０口径５１センチ砲を２連装２基６門。副砲に６０口径１５．５センチ３連装２基６門。６５口径１２．７センチ２連装両用砲４基８門。近接防御火器は最新の４０ミリ６砲身ガトリング砲８基。船体前後部に多目的ＶＬＳ計１６基。新型のレーダーとコンピューターが搭載され武装はすべて自動化されている。

小型の超兵機機関が動力のため５６㎝の超装甲戦艦にして４０ノット近くの高速を誇る。球状船首と流麗な船体も抵抗を減らしていることから超兵器高速巡洋戦艦ヴィルベルヴィントの船体試作とされたと思われる。この高出力機関の恩恵で防御装備――重力電磁障壁装置の搭載を可能にしている。重力電磁障壁は特殊磁場を一定方向に向けて発生させることで文字通り不可視の壁を作り出し外からの運動エネルギー、熱エネルギーを防ぐ。しかし、壁の維持は莫大なエネルギーを消費するため、障壁がダメージを負い続けてしまうと機関が一時的にショートし、完全な無防備状態に陥る。全自動化をしてあることで機関が復旧しない限り危険な状態になることから、従来の超兵器は機関を大型にした経緯が浮かび上がる。

ウィルキア反乱戦争時はヴァイセンベルガ―帝国元首の旗艦であったが、超兵器リヴァイアサンが完成したため母港シュヴァンブルグ港内のドックにて入渠された。

反乱終結後は近衛艦隊旗艦に就役。近衛司令官アルベルト・ガルトナーの乗艦となり、後の司令官ライナルト・シュルツの乗艦となる。

反乱から数十年……反乱軍残党により目覚めた究極超兵器フィンブルビンテルとの戦闘で大破、爆沈した。
名前の由来はヴァルキュリアのスヴァンフヴィート（白鳥のように美しい）からきている。
白髪のショートヘアで瞳の色は緋色。ウィルキア帝國軍服を思わせる紺色の軍服に、白のマント、軍帽には白鳥と剣の刺繍されたのも被っている。中性的で、体のラインがやや平坦の近いことから男性と見えたりもする。
性格は冷静で沈着であるが根はやさしく、艦娘だろうと深海棲艦であろうと同等に接する。生前が近衛旗艦であったことで並大抵のことでは驚かないが、それは旗艦としての矜持が抑制しているだけであって表情に出ないだけ。
祖国ウィルキアが無いと知らされた時は、無意識に涙を流していた。

←（ゲーム上の設定）

船体　ドリル戦艦（船首ドリル両舷側ソーを撤去）
前部艦橋　日本戦艦艦橋α
後部艦橋　独国戦艦艦橋α
機関　主缶　小型超兵器機関（核融合炉Ⅰ　４基）
主機　標準タービンε　４基
煙突　独国戦艦煙突Ⅴ　１基
速力　３９．１ノット
防御　対５６㎝防御
舷側装甲　５８９
甲板　４７２
水中防御　４７
兵装　５１センチ５０口径２連装砲　２基

１５．５センチ６０口径３連装　２基
チャフグレネード　２基
照明弾　２基
多目的ＶＬＳ　１６基（２５０セル）
・弾頭　通常弾頭２２０本
探針誘導魚雷（アスロック）２５本
特殊弾頭５本
１２．７センチ６５口径２連装　８基
４０ミリ６砲身ガトリング砲　８基

補助兵装　電波標準儀γ
自動迎撃システムⅢ
超重力電磁防壁
新型火器管制装置
新型射撃レーダー
多機能レーダー
電子光学方位盤Ⅱ

搭載航空機　ヘリ４機　クレーベ（ブラックホーク）
ＵＡＶメーヴェ２機

戦艦シュヴァンフヴィードの帰還

少女が初めに感じたのは浮遊感。次いで瞼を開け自分が水の中にいるということ。
目の前に見える光が徐々に遠くなっていくこと。
彼女は光に、水面に向かって手を伸ばそうとするが、身体に力が入らない。やっとの思いで手を伸ばせたときに彼女はすっと目を細め悟った。
――ああ、私は沈んでいくのか。
暗くなる視界に不思議と恐怖は感じていなかった。いつか訪れることだと覚悟はしていたし、自分も多くの姉妹たちをこの暗闇に沈めてきた。
――使命の為に。
――存在意義の為に。
――矜持の為に。
――生き残るために。
沈めて、沈めて、沈めてきた。
ただ今度は私の番が来ただけのことだと遠ざかる光を見つめ少女は思う。
開いていた瞼も徐々に重く、視界が薄らいでいく。
――もう……いいか。
最後の景色を見終え、少女は瞼を閉じて暗闇に吸い込まれていった。
敗れた物たちが行き着く――水底の墓場に。

無機質な鉄の冷たい床に小女は寝ていた。白磁のように白い肌に整えられた純白のショートヘア。まだ顔に幼さを残した少女だ。薄い灰色の長布を被されている。
「――あ――お――てく――」
暗闇に中に響く声に、少女――シュヴァンフヴィードの意識が覚醒

した。
――だれ？　私を呼ぶのは？
瞼を開けるとまぶしい光に反射的に目を細める。
「起きてくれたのですねかんちょー！」
徐々に慣れてきた視界に入ってきたのは頭が饅頭みたいに大きく、しかし体の大きさも比例している、いわゆる二頭身の生き物たちだった。
「……ッ!?」
驚いて反射的にシュヴァンフヴィードは跳ね起きた。
当然被されていた長布は重力に互い落ちると、中から白磁の美しい裸体が露になった。
「おお、かんちょーが起きたぞ！」
「……かんちょ」
「よかった！　よかった！」
「やっとお目覚めか」
わいわいと騒ぎ立てる二頭身の生き物にシュヴァンフヴィードはたじろいだように目が泳ぐ。
二頭身の生き物は5人ほどいる。よく見るとそのすべてが紺色の軍服に帽子を被っている。シュヴァンフヴィードはその服装に見覚えがあった。ウィルキア王国海軍士官の軍服だ。
「……だれ？　なんでその軍服を着ているの？」
「はっ！　我らはシュヴァンフヴィードかんちょーの艤装妖精です！」
質問に一人が敬礼し答え、他もそれに習い全員敬礼した。どうやら敵意のある相手ではないようだ。落とした長布を広いマントを羽織る。彼ら艤装妖精を改めてみると軍服の下部がズボンであったりスカートだったりとするが、顔立ちや髪型から女性なのだと見て取れた。
「私は艤装妖精統括長兼副長であります」
そう言うのはシュヴァンフヴィードに初めて声をかけてきた妖精だ。

「艤装妖精？　艦長って私のこと？」
「そうであります」
「私は艦……艦長じゃない」
　否定するがシュヴァンフヴィードは自身に四肢があることから確信を持てなかった。私は艦の記憶を持っているただの人間なのでは？
　凡人なら気が狂いそうな事態ではあるが、シュヴァンフヴィードは別段、驚きや動揺するような素振りを見せなかった。
　しかし、艤装妖精たちは互いに顔を見合わせながらおろおろしている。副長と名乗った妖精を除いて。
「いいえ、貴女は我々のかんちょーです。一度沈んだ貴女は艦娘として生まれ変わったのです」
「艦娘？」
「はい。沈んだ艦の魂魄が人の形をもって現世に顕現する存在……なのではと思います」
　そう言う副長であるがどこか釈然としていないようにシュヴァンフヴィードには見えた
「自信がないのね」
「……申し訳ありません。我々も自分たちがどのような存在なのかわからないのであります。わかるのは貴女がシュヴァンフヴィードであること。そして我々は貴女の一部であることであります」
「私の一部？」
「はい。貴女がどのように生まれ、どのような戦場に向かい、どのように戦い、どのように沈んだのかも……我々一同は知っています」
　俯く妖精たちに、そうっとシュヴァンフヴィードは短く吐息を出すように頷く。
　あの沈んでいく感覚はまぎれもなく本物なのか。彼女たちは思うところはあるのだろうけど嘆いても一度沈んだ事実は変わらない。
　アレより私は弱かった……ただそれだけなのだから。
「貴方たちが私の一部ならわかるはず。悔やんでも、嘆いても仕方ない。それよりも艤装とかわからないことの説明をして」

淡々と話を切り替えるがその声音は若干、苛立ちを帯びている。
「……はい。申し訳ありません。艤装というのは艦娘しか動かせない専用の装備だと思ってください。それぞれの艦娘の生前の艦そのものが艤装になります」
「前の体が艤装ってことなの？」
「ご明察です。今我々がいるここは艦橋であります」
確かにそうだとシュヴァンフヴィードは辺りを見渡した。
防鏡から日差しが刺して室内は明るいが、計器類が動いていない。まるで魂が失われているように沈黙しているように彼女には見えた。
「…艤装は動いてないの？」
「はい。現在艤装は全体機能が停止状態であります」
「起動をするには？」
「貴女が接続すれば艤装は動かせます。中央にあるサークルの中心に立ってください」
副長妖精が指さす先は、魔法陣のように床が造られている。
ちょうど部屋の中心の辺りだ。
「……わかった。それで……服はないの？」
今のシュヴァンフヴィードは被されていた長布を羽織っているがその下は全裸である。
羞恥心は感じていないが、彼女らの前でいつまでも全裸でいることがみっともないと感じていた。
「申し訳ありません。かんちょーが目覚める前に艦内を隈なく調べましたが衣類は自分たちのしかありませんでした」
「そうなの」
なら仕方ないか。シュヴァンブルク港に帰港したさいに軍服を支給してもらおう、と考える一方、自分のことをどう本国の近衛艦隊司令部に説明しようかと逡巡しながらシュヴァンフヴィードはサークルの中心に立つ。
ガコンっと立っている床が微か沈み、まばゆい光が輝く。
光は全身を包み込み羽織っていた長布が吹き飛んだ瞬間、
――起動対象艦娘……シュヴァンフヴィードと確認。接続プロセ

スを開始します
脳内に機械的な無機質の音声が聞こえた矢先、大量の情報が一気に流れる。
――機関始動、３０……６０……９５パーセント稼働率正常。
――重力電磁場の展開を開始……２０……５０……９０……出力１００パーセント、フィールド安定。
――全方位レーダー起動……索敵内に反応なし。
――武器管制システムオンライン……主砲５１センチ砲……副砲１５．５センチ砲……１２．５センチ砲……４０ミリバルカン砲……多目的ＶＬＳ……確認完了、全武装オールグリーン――
「……うぅ……あぁぁ……っ！」
驚きのあまり目を見開く。
大量の虫が這いずるような不快感で小さな悲鳴を上げ、背ずしが強張り身体ががくがくと震える。
シュヴァンフヴィードは耐えるようにギュッと手を握りしめた。
情報の波に飲み込まれないように集中しなければたちまち意識を持っていかれかねない。
不快の濁流の中、シュヴァンフヴィードは自身の視覚、聴覚の感覚が研ぎ澄まされ、体の奥底から変化していくことに気づいた。サークル内の光は粒子になり、体のラインを沿うように全身を包んだ。
瞬間、繭のように全身を包んでいた光は消滅し中から現れたシュヴァンフヴィードは変身していた。
紺色を基調としたウィルキア海軍伝統の軍服を身に着け、軍帽を被り、白のマントを羽織、軍靴を履き、腰にサーベルを帯刀している。
間近でその姿を見た妖精たちは一斉に集まり出す。
「くぅ……はぁ……はぁ……」
光の消滅と共に脳内に送られてきた情報の波も収まっていた。
額からどっと汗が滲み出て不快感をより一層高めた。
「かんちょー!!」
「……大丈夫？　ねぇ……大丈夫？」
「がんばれかんちょー！　がんばれー！」

「深呼吸だ、それで息を整えるのだ」
「……はぁ……大丈夫」
わいわいと騒ぎ立てる妖精たちを見て肩で息をしながらも気丈に振る舞う。
「大丈夫でありますか？」
「ええ……それよりこれは？」
軍服を身に着けていることに気づいたシュヴァンフヴィードは振り返り副長に尋ねる。
「恐らく艤装に接続したことで本来の姿になったのだと思われます。艦娘が艤装を使用するとき専用の戦闘服に身に着けるようです」
「なるほど、これがね」
軍服に目を通し頷く。
額の汗を拭うために軍帽を脱いだとき、軍帽には祖国ウィルキアの象徴――白鳥、力を表す剣が二本、金色の糸で刺繍されていた。
シュヴァンフヴィード、その意味は……白鳥のように美しい。名の由来は北欧神話に記されている戦乙女の一人、スヴァンフヴィード。
刺繍まさに彼女自身を表していた。

出発

「では、改めまして我々の自己紹介をいたします」
そう言うと「全員気を付け！」と副長が号令した。
５人はピッと背筋を伸ばし、足を揃える。その行動は一矢の乱れも感じさせない。
「かんちょー殿への自己紹介を始める。私から見て右の者から順に一歩前に出て始めるように」
「「「はい！」」」
「よし、はじめっ！」
一歩前にショートヘアー、軍服が女性用のスカートタイプの妖精が出る。
「自分はシュヴァンフヴィードかんちょー艤装妖精、砲雷長であります！職務は主砲から対空砲、ミサイルなどの搭載武装、射撃レーダー、ソナーなどから探照灯、錨、短艇、クレーンなどの操作ができます！早く５１センチ砲をぶっ放したくてうずうずしているであります!!」
砲雷長と名乗った妖精は元気いっぱい、はつらつとしている。
「そう焦るな。敵が来たら嫌でも腹いっぱいに砲弾を叩き込む機会がくる。それまでは待機だ、次っ！」
「あぁぁ……早く敵来い……早くて敵よ来い」
何やらぶつぶつと呟きながら一歩下がる砲雷長に若干の不安を残すも、次の妖精が前に出る。
「同じく……かんちょうの……艤装妖精……船務……長、です。主な職務は……ＣＩＣの運用……レーダーや通信の……操作……整備、です」
船務長と名乗った妖精は標準な軍服にヘットセットを身に着けている。髪はやや長めのセミストレート。前髪が目元を隠していて口調と相まって内気な性格なのだとシュヴァンフヴィードは感じた。
船務長は「どうぞよろしく」とボソッとつぶやいて後ろに下がる。
「船務長、もう少し言葉にメリハリを付けろ。状況をいち早く伝える

者がぼそぼそと小声でどうする」
「……善処します」
「はぁ……まあいい、次は……」
「はい！　わたしです！」
　跳ねるように前に出た妖精は、ウィルキアの軍服を基調としているようであったが、どことなく学生服にも見える軍服を着用していた。
　髪は船務長と同じセミロングであるが後ろで一束に纏めるポニーテールである。５人の中で唯一眼鏡をしているのも特徴だろう。
「わたしは……じゃない、自分は艤装妖精の航海長です！　職務は航海、信号、見張りに艦長の代わりに操艦、気象観測なんかも担当します！　精一杯頑張ります！　よろしくお願いしますかんびょッ！」
　噛んだ。最後の最後で噛んでしまった。
　若干の静寂の後、航海長はぷるぷると震えながら、涙を瞼に貯めていき、
「びぃやあああああっ！　最後の最後でかんじゃったぁあああああっ!!」
　ダムが決壊したごとく大泣きしてしまった。
「こ、航海長、誰でも緊張気味では噛むこともある。そんなに気にするな」
「ひっぐ……だって……ぐずっ……砲雷長も船務長っ……も……うぅ……ちゃんと言えてたもん……私だけだもん」
　幼子のように泣きじゃくる航海長にシュヴァンフヴィードは歩み寄り、膝を落とす。
「大丈夫。貴女の熱意は伝わった。だからそんなに泣くことはない」
「うっぐ……がん〝ぢょーあ〝じじゃどうごじゃいま〝ず。じぇいいっばいがんだりま〝じゅ」
　航海長はぐしゃぐしゃの顔で敬礼した。
「次は……」
「あたしだな」
　スッと最後の妖精は前に出で敬礼する。長袖が一般の軍服に対して彼女のは薄着の半袖タイプの軍服を着用している。

髪はバッサリとしたショートヘア。顔つきややむっとしているためか、威圧的な印象を受け、軍人らしい女性だ。

「自分は艤装妖精の機関長。職務は艤装主缶の主機の整備。火災、浸水時のダメージコントロールなどを行います。いつでも万全の状態で艤装を動かせるように日々、精進していく所存です」

「艦娘の艤装は機関が命だ。その責務は重大であるが無理をするなよ機関長」

「はっ！　副長殿！」

ピッと背筋を伸ばした敬礼をして機関長は列に戻る。

そして最後に、副長が振り向き前に出る。

標準的なウィルキア海軍伝統の軍服に身を包む。

髪型は砲雷長同じショートヘアであるが毛先が整えられており真面目さが出ていることが伺える。

「改めまして自分は、艤装妖精統括長兼副長であります。職務は艤装妖精の統括、及び人員配置などを担当。副長としてはかんちょー殿をできる限り補佐していく所存です。ここにはいませんが食堂では補給長、航空機格納庫に整備長、航空機長他数百名の妖精が職務を全うしております。以上がシュヴァンフヴィードかんちょーの艤装を預かる艤装妖精であります。よろしくお願いいたします」

「こちらこそ、よろしく」

「はっ！　全員かんちょー殿に敬礼！」

一糸乱れぬ敬礼にシュヴァンフヴィードも自然と背筋を伸ばし敬礼をした。

「それじゃ、艤装が起動したことだし、これからの方針について話を始める」

「「「「はっ！」」」」

艤装は稼働し、船行に必要な最低限の乗員？は揃っているため、シュヴァンフヴィードは自分たちが如何に行動するべきかを話し始めた。

ここで艤装と艦娘、妖精について触れておく。

艤装は艦娘と接続状態のときは体の一部のように動かすことができる。いや、正確には船体を動かすことしかできないのだ。
付けられている兵装、索敵、通信、ダメージコントロールに至る機能の操作は、艦娘には基本できない。数多の制御を同時並列で行うと自身に負荷が掛かり、最悪重大な障害をきたす恐れがある。そのため艤装妖精は艦娘の補佐として存在している。
副長が先ほど述べたように妖精は艦娘の一部、制御ができない機能を補うことで艦娘が艤装の操作に集中することができる。
つまり艦娘と妖精、両者が十全に機能することで艤装は遺憾なく性能は発揮することができるのである。
艤装との接続時に流れ込んできた大量のデータの中にはこのことはもちろんある。
「まずは現在の状況について確認するよ。副長、私が眠っている間に船内――艤装内を調べた？」
「はい、乗員妖精総員で艤装内を調べました」
「食料はあるの？」
「補給長の報告では食糧庫には一月ほどの食料が備蓄されているようです」
死活問題であると思われた食料難は回避され胸を撫でおろす。もしも食料がない状態で航行など地獄にも等しいからである。
「そう。それはよかった。次に砲雷長、弾薬はどれくらいあるの？」
「はい！　搭載兵装は全て稼働できる状態であり、弾薬もミサイルも装填済み！　弾薬庫も満載で戦闘状態になったとしても支障はありません！　ていうか早く戦闘状態になれって感じです！」
息を荒げながら報告する砲雷長。物騒なことを最後に言っていたが弾薬の無い戦艦など的代わりの鉄の塊に過ぎない。もしも、敵対的艦船、航空機に出くわしてその都度進路を変更しての航海を余儀なくされてしまう。その不安が無くなり一安心だ。
「わかった。航海長、現在位置は？」
「はい！　北緯５７度３０分、東経１７６度１７分、ベーリング海海上と思われます」

「ベーリング海……か」
ベーリング海は生前シュヴァンフヴィードが沈んだ海域であり、多くの姉妹たちの墓場である。そして自身と共に沈んだ最悪の存在が眠る場所でもある。
この海域で沈み、蘇ったシュヴァンフヴィードの心中は複雑であるが今は奥にしまう。
「母港シュヴァンブルグまでの航海ルートの算出はできている？」
「はい！　３５ノットでおよそ二日の航海です」
「機関長、艤装は起動したばかりだけどその速度で大丈夫？」
「問題ない。すでに機関は確認済みだ。見事なまでに新品だったぞ」
ふふんっと機関長は自慢げに鼻を鳴らした。
ここまで彼女らは質問されたすべてに答えいる。彼女らの能力の高さと行動力があることがわかり、補佐役としては優秀であるとシュヴァンフヴィードは感嘆した。
「わかった。艤装の状態は万全、なら私たちの方針は一つ。母国ウィルキアに帰還する。異存は？」
「「「「……」」」」」
「ないのなら直ちにウィルキアに向け出発する。総員出発準備に掛かって」
「「「「了解っ！」」」」
砲雷長と船務長はＣＩＣへ、機関長は機関室へと艦橋を後にする。
残されたのは副長と航海長。
船務長は海図の敷かれたテーブルの前に立つ。
シュヴァンフヴィードもサークル内に立つと、
「かんちょーこれをどうぞ。これで艤装内の各長たちへ連絡ができます」
副長がヘットセット型無線機を手渡した。
「ありがとう」
お礼をいい、ヘットセットを被りスイッチを入れる。
耳の中にじぃーっとノイズが走った。
「こちら艦長のシュヴァンフヴィード。各長、声が届いているのなら

応答して」
『砲雷長であります。感度良好であります』
『同じく……船務……長……聞こえて……います』
『こちら航海長。すぐ後ろにいますが、無線の状態はオッケイです！』
『機関長だ。聞こえている』
『聞こえているよかんちょーさん。はじめましてあたしが補給長さ、よろしくね』
『こちらは格納庫、整備長です。出頭せずに申し訳ありませんでした。のちほど伺いますかんちょー』
『同じく格納庫、航空機長だ。整備長と共に艦載機の調整をしていたため出頭できなかった。申し訳ない。整備長と共にお伺いする』
　七人との長との連絡が通じ、返信が来た。
「本艦はこれより、母国ウィルキアへ進路を取る、各長は職務を果たすように」
『『『『『『了解！』』』』』』
　通信を終わり、シュヴァンフヴィードは艤装を動かすため集中する。
　ゴォオオンっと四枚のスクリューが回転を始め、船体が前進していく。
「航海長、進路は？」
「はい！　進路２１０。へ変針願います」
「わかった」
　シュヴァンフヴィードは航海長の言う通りに艤装を回頭し終えると、徐々に速度は上げながら白鉄が晴天の海原を行く

艤装内の巡検、接敵

――アルフォンシーノ方面。
シュヴァンフヴィードが復活したベーリング海海域の名である。
小さな島々が列島のようにアメリカ西部海岸までつながっている。
この海域には小さな泊地と飛行場が点々と健在しており、深海棲艦の東部方面進行拠点となっている。
無論、彼女たちは知るはずもなく、敵の庭を何食わぬ顔で南下していた。

出発して１２時間、シュヴァンフヴィードは艦橋内に居なかった。初の艤装操縦は負担が予想以上に掛かり、副長が休憩を具申したからである。操舵権を航海長に委ね休憩ついでに副長と共に艤装内の見回りをしようとしていた。
前艦橋のエレベーターでＣＩＣルームの階まで降る。
エレベーターが開くと、「関係者以外立ち入り禁止」と掲げられた扉が目の前に見えた。
室内に入ると、中には電子機器がそこらかしことあり、数人の妖精たちが神経を研ぎ澄まし計器を凝視している。
「だれ……かんけいしゃい……かんちょー……」
「おじゃまします」
「……失礼……しました」
船務長は入室者がシュヴァンフヴィードと分かると、若干の驚きを見せて敬礼、それに合わせ室内の妖精も続いた。
「楽にして。船務長は変わったことはない？」
「……はい……水上……対空レーダー……ソナー……共に感……なし……です」
「そう……船務長」
「なんで……しょう……あっ！」
シュヴァンフヴィードの手が船務長の前髪をかき分けた。
呆気にとられていた船務長はかぁあっと顔を真っ赤にする。

「前髪を分けていた方が貴女には似合うわ。こんなにもかわいい顔をしている」
「か……わわわわわっ!???」
　しゅうううっと擬音が聞こえるほど船務長は高揚した。
「それじゃ。みんながんばってね」
「「はい！」」
「副長、行こう」
「はい」
　踵を返しシュヴァンフヴィードと副長はＣＩＣルームから出ると
「船務長大丈夫でありますか?!」「ああ、なんて嬉しそうな顔して気絶してるんだろう……」「いいな、私もかんちょーに触れてほしいな～」
と扉の閉まる直前に聞こえた。
　エレベーターに再び乗り、1階の通路を進んでいるとどこからかいい匂いが漂ってくる。誘われる様に進むとそこは食堂であった。
「前菜の容易はいいかい！　」
「アイマムッ！　できています！」
「ならメインの調理を手伝ってやりな！　下処理に時間をかけ過ぎて遅れている！」
「イエスマムッ！」
　怒号と熱気を発しながら妖精たちは料理をしている。その一角に指示を出しながらも手を動かし、人一倍に調理をしているのが、我らが縁の下の力持ちの補給長である。
　白シャツの上に調理用のエプロンを掛け、三角巾を巻いている。
　入ってきた二人に気づいて声を掛けた。
「かんちょー殿！　このような姿で失礼します」
　手にした包丁を置き、敬礼するがすぐに調理に戻る。
「いい。こちらこそ仕事の邪魔をしてごめんなさい」
「とんでもない。こちらから出頭するのが規則ですが、この通り補給員総出で料理を作らないといけなく、それでも足りないくらいです。猫の手も借りたい状況ですよ」
　話しながらも補給長の手は止まらない。

厨房を見渡しシュヴァンフヴィードは頷くとぐぅっと空腹を知らせる音がなった。
「……」
恥ずかしそうに顔を反らすと補給長が吹き出した。
「あっはっは！　少々お待ちください、ただいま軽食を用意しますから」
「……いい」
拗ねたように断るが、
「はい、サンドイッチとコーヒーです。副長の分も用意しましたからお好きな席でお食べくださいな」
「……いいといった」
「かんちょー、貴女は万全でないといけません。だから今は食べて力をつけてください……それともあたしの飯が食べれないと言いますかい？」
びくっと食堂に居た全員の背筋に凍る。補給長はニコニコとしているが口元と目元が揺れている。
「……ありがとうございます。残さずに食べます」
「かんちょーと同じく」
「そうかい。食べ終えた食器は返却口に置いといてくださいな」
スタスタと逃げるようにテーブルに着く。
「補給長こわい」
「気が強いでありますが、いい妖精でありますよ」
片言になりながらサンドイッチを食しているシュヴァンフヴィードに副長は苦笑。
小腹を満たしたところに
『かんちょー……水上レーダーに感あり……数は……6……前方0—1—0……距離約70……です』
船務長からの通信が届くと同時にシュヴァンフヴィードの脳内に情報が送られてきた。網膜に投影されたレーダーに光点が表示されている。
「副長、どう思う？」

「情報が少ないです。敵にしろ味方にしろ今は、無人偵察機を送り、偵察をしてみてはいかがでしょうか？」
「そうね。そうしようか」
敵、と聞きシュヴァンフヴィードは考え込む。
艤装との接続時に送られてきた情報には敵と識別する存在のデータが存在した。
――深海棲艦。
突如として全世界の海域に出現した生物の呼称である。
その全てが軍艦と生物を混ぜた異形としか言えない姿かたちをしている。大きさは駆逐艦クラスから大型の戦艦クラスまでさまざまであり、近年は艦娘型深海棲艦が確認されていた。
そして深海棲艦が現れた時期に呼応して艦娘も世界に顕現していた。
その事実からシュヴァンフヴィードは思うのだ、深海棲艦とはいったい何なのかと。
その考えはいったん頭の隅の方の追いやり、無線機のチャンネルを合わせる。呼び出すのは航空機長だ。
「航空機長、無人偵察機を反応のあった海域に飛ばして」
『直ちに準備出来次第発艦させます』
「お願いね」
『はっ！』
通信を終えると、残っているサンドイッチとコーヒーを口の中に放り込み、二人は艦橋に急いで戻る。

シュヴァンフヴィードの艤装には少数ながらの艦載機が搭載されている。
その一つに無人偵察機メーヴェがある。
全長は7メートル。全幅13メートル。航続距離約3000キロメートル。上昇限界高度は8000メートル。無線操縦により艤装内に居ながら安全に偵察行動が可能である無人航空機だ。
搭載兵装は皆無で前部にセンサーが搭載さており、高高度からの敵

艦隊、敵地偵察に特化してある。シュヴァンフヴィードに搭載されているメーヴェの機体色は迷彩効果を踏まえた白い機体色になっている。
「整備長、メーヴェを飛ばすぞ。準備を頼む」
「まかせとけ航空機長。野郎ども仕事だ！　ちんたらしてるとかんちょー殿の信頼を失う、全力を尽くせ!!」
「「「おう!!」」」
蜘蛛の子を散らすように整備長と整備員妖精は作業に取り掛かる。
「エレベーター降ろします」
警報が格納庫に鳴り響き、天井の一角が沈み込む。このエレベーターを使い艤装外へ運び出す。
降り終えたエレベーターにメーヴェを人力で押し乗せ、備え付けのカタパルトへの固定作業に入る。整備員の手つきは慣れたもので、メーヴェは3分と掛からずに固定された。
「カタパルトへの固定作業を終了しました整備長！」
「よし、上げろ！」
警報を鳴らしながらエレベーターは無人偵察機を乗せ上昇していく。
『準備完了したぞ、航空機長。あとは任せる』
「おう！　センサー員準備はいいか？」
無人機操縦室に居る航空機長は後ろのセンサー員の顔をのぞき込む。
「システムチェック、センサーの起動を確認。感度良好。ＣＩＣとのデータリンク確認。グリーンライト、いつでもどうぞ」
「了解。エンジン始動」
甲板に到達するとカタパルトに設置されたメーヴェの後部レシプロエンジンが唸りを上げる。
「メーヴェＩ発艦準備良し」
『了解メーヴェＩ発艦』
「発艦！」
メーヴェはカタパルトから緩やかに飛び立つと水上レーダーの反

応があった海域の空へ旋回し速度と高度を上げて行った。

戦闘

『現在……メーヴェＩ（アインス）……高度７０００を……１３０キロで飛行中。不明艦隊……進路変わらず……約２０ノットで……本艦に接近中……です』
「ありがとう、船務――」
『――こちらメーヴェＩ！　センサーカメラの視認距離に入りました。報告します。不明艦群は深海棲艦。繰り返します深海棲艦です！』
　航空機長からの通信を聞いていた全員に緊張が走る。
「間違いはない？」
『はい！　空母１、戦艦２、駆逐艦３隻の空母戦闘群です！』
「航空機長、センサーカメラの表示画面の情報を私に送って」
『了解、センサーカメラデータ送信』
「っ！」
　送られてきたメーヴェＩのセンサーカメラは遥か眼下に点在する６つの物体を捉えていた。
　魚類のような形をした異形の生物３匹を先頭に、幽霊船のような外見をした戦艦と空母が後に続く。
　すぐさまシュヴァンフヴィードは艦種の特定を始めた。
　――データ照合中……完了。
　先頭を行く生物は駆逐イ級、前部に２門、後部に１門の３連装砲を積んでいるノースカロイナ級戦艦は戦艦ル級。中央に守られているヨークタウン級空母は空母ヲ級と断定された。
「総員戦闘配置」
「はっ！　総員戦闘配置！　これより我が艦は深海棲艦戦闘群と戦闘に入る！」
『ＣＩＣ……了解。全システム戦闘モードに移行。砲雷長、ウェポンチェックを』
『了解であります。主砲、副砲、準備より。両用砲装填。ガトリング砲スピンアップ、異常無し、装弾完了。ＶＬＳ発射回路接続――戦闘準

備完了』
『機関室、ダメージコントロール要員準備よし』
『見張り員準備良し』
「かんちょー、戦闘準備完了です」
戦闘態勢にシュヴァンフヴィードは入った。

時同じくして、機動戦闘群の旗艦ヲ級は、寮艦ル級が水上レーダーで不明艦船を捉えたと知らせを受ける。この海域は自分たちの庭であるが、単艦での出撃をした船舶の情報はなかった。
不審に感じながら、彼我の距離５００００まで近づいたあたりでル級から再び通信が入る。
『不明艦ハ艦娘！　間違イナイ！　戦艦クラスダ！』
聞いたヲ級は困惑。なぜ自分たちの領海内に敵が居るのか。しかもこんな深くに単艦。
（ナゼコンナトコロニ？　シカモ一隻デ……）
謎が謎を呼び込み、思考が混乱するが（コレハチャンスダ！）と考えた。
相手は1隻、空母航空機もない丸裸。こちらは圧倒的有利な航空戦力と戦艦2隻と護衛の駆逐艦が3隻。これを沈めれば、自身の名声と上位の深海棲艦からの恩賞があるかもしれない。
そう思いついたヲ級は不敵に笑う。

「了解。旗艦ハ艦載機ヲ飛バシテ後方二待機スル。戦艦ト駆逐艦ハ前進ダ」
『『了解』』
ル級とイ級は速度を上げ、突き進み、ヲ級は小回りに風上へ艦首を向ける。
『艦載機発艦シロ！』
カンっと手にしたステッキで床を叩く。
すると、甲板上から黒いヘドロが浮き出、艦載機の形を成していく。
しかし、それは飛行機とは名ばかりの黒い物体に機銃と1門と爆装を

２発つけている。異常なことに翼がなく、上顎のような白い歯と舌が見える。
『イケ！　艦娘ヲ水底ニ沈メテコイ！』
異形の艦載機はエンジンもなく浮遊し、シュヴァンフヴィードに向け飛び立った。恨むなら単艦でアルフォンシーノ方面に来たことを呪えと。
しかし、ヲ級は軽率であった。
自分たちの常識を遥かに超えた存在に弓を引いてしまったのだから。

メーヴェＩのセンサーカメラからは艦載機が次々飛び立たち、シュヴァンフヴィードに向けていく様子が映し出される。
『彼我の相対距離……約４５０００――っ！　敵艦隊……から艦載機……発艦……数３０……約８分でくる』
瞬間、対空レーダーには小さな光点が表示された。
「ＶＬＳで空母を叩き、砲撃戦で残りを殲滅する。対空戦闘用意。主砲、キャニスター弾装填。ＶＬＳ発射管扉開放、弾頭多目的、ミサイル３本連続発射用意」
『主砲対空キャニスター弾装填了解でありますが、ミサイルは３本でよろしいのですか？　重力電磁障壁は最低でも対艦ミサイル１０発以上の飽和攻撃が必要かと具申いたします』
砲雷長の意見にも一理あった。重力電磁障壁は最低の出力の物でミサイル１、２発を防ぐことが可能である。
生前、ウィルキア反乱戦争が終結してからは駆逐艦にも装備され、ロングレンジからの殲滅戦は容易ではなかった。
特に空母は戦術的重要性から高出力の重力電磁障壁は発生装置を搭載されていた。
だが、この程度の戦力にミサイル１０本以上を使用するまでもなく、艤装の戦闘に慣らすことをシュヴァンフヴィードは優先した。
「わかっている。けど、この程度の戦力に本気を出すまでもない。逃

げるのなら逃がして」
『了解。ＶＬＳ発射管扉開放！　一番から三番ミサイル装填――ロックオン』
「発射」
「発射了解！」
　砲雷長は発射スイッチを押す。
　ゴォオオオオッ!!
　前部に搭載されたミサイルサイロから3発の多目的弾頭ミサイルは噴煙上げ、放たれた。
　艦橋が発射の衝風でガタガタと揺れ、まぶしい光が差し込み、白煙が巻き上がる。ミサイルは９５０キロまで加速し、目標に向け飛翔する。

　前進していたル級の戦隊は、主砲１６インチ砲の射程まで迫っていたが、航空機隊の攻撃を待っていた。
　自分たちは航空機隊が沈め損ねた手負いを沈めることが役割であった。
「シカシ、ナントイウ艦ナンダ」
　近づいて行き、その全体がはっきり見えた時に、シュヴァンフヴィードの白銀に輝く船体にル級1は言葉を漏らす。
　その時、船尾方向から上空に３つの飛翔物が打ち上げられた。
　飛翔物は真っすぐこちらに向かってくる。
「ナンダアレハ?!」
　飛翔体のあまりの速さに驚きながらすぐに対空砲火を張る、が飛翔体は戦隊の頭上を通り越していく。その方向は旗艦がいる方向だった。嫌な予感がル級1の脳裏をよぎる。
「コチラル級1！　ヲ級旗艦、謎ノ飛行隊ガ其方二向カッテイマス！」
『ナニ？　レーダー二ハ――』
　ぶちっと通信が切れ、ノイズだけが響きル級は血の気が引いた。
　防空艦橋に出て後方を見ると、薄っすらと黒煙が伸びていた。

――間違いない。アレにやられたんだ。
言い知れない恐怖がル級1の心臓を鷲掴みにした。
『ネエサン……ヲ級旗艦は……』
妹のル級2のはっと声に我に返る。
「……恐ラク、サッキノ奴等ニヤラレタンダ」
『タッタ3ツノ飛翔体デ空母ガ撃沈?!』
「通信ガ途絶エタンダ……其レ以外ニ何ガアル！」
ル級1は怒鳴った。
自分でも信じられないが空母が沈んだのは事実だ。敵は我々が知らない、未知の兵器を搭載している。
そう確信した。
旗艦が沈んだことにより恐らく指揮権は自分に委譲する。
僚艦を従え戦闘を継続するかするか、あるいは……逃げるか。
ル級1は意を決し決断した。
「ル級1ヨリ全艦へ、ヲ級旗艦ノ弔イ合戦ヲスル！　全艦最大船速！
我ニ続ケ!!」

『こちらメーヴェI。敵空母にミサイル全弾命中。空母は炎上し機能は停止した』
「了解、メーヴェI。引き続き敵の索敵行動を続けて」
『メーヴェI了解！』
『こちら防空艦長、敵航空機群接近！　右舷0―1―0、高度6000、距離12000！』
「了解」
シュヴァンフヴィードは取り舵をして横腹を敵機にさらす。
「主砲1、2番右旋回」
『了解、主砲旋回。射撃レーダー、敵編隊を補足。仰角15、散布角3――』
そして、
「――撃て」

『主砲一斉射――撃ええええっ!!』
５１センチ砲が轟音を発した。凄まじい反動が巨大な艤装をやや傾斜させる。
６発の砲弾は一直線に敵機に突き進み、半径１５メートルに入ると近接信管が作動、破裂し爆風で砲弾内の１０００以上の小砲弾が四散して降り注ぐ。
敵機は胴体に数十の小砲弾が殺到し、ハチの巣にされ、搭載された機銃の弾薬と爆装が誘爆を起こす。
たったの一斉射で全体の６割を撃墜した。
「ひゃっはー最高だぜー!!　１２．７センチ両用砲の追撃を食らえ蚊トンボども!」
ハイテンションになった砲雷長はトリガーを引いた。
両用砲の追撃が敵機に襲い掛かる。砲弾は無論、近接信管内蔵である。
「砲雷長……もっと……考えて撃って」
「弾をばらまくのもセオリーだ!　撃って撃って撃ちまくれ!!」
「アイマム!」
船務長の静止をはねのけて、部下と共に射撃トリガーを引きまくる。
その度に、敵機は木の葉の様に爆風に揉まれたように撃墜されていった。
『航空機部隊ガ全滅シタ?!』
「アレヲフ普通ノ戦艦ト思ウナ!　駆逐艦ハ突撃!　ワタシトル級２ハ旋回シテ前後砲デ攻撃スル!」
『リョ、了解』
『敵航空機群……全滅を確認。敵艦……駆逐艦……イ級３隻が突出……してきます。戦艦ル級は……２８０００で右へ回頭』
「砲雷長、主砲１，２番徹甲弾装填」
『了解!　徹甲弾装填――』

『敵艦発砲！』
「機関長、重力電磁障壁発生装置起動」
『了解だ！』
シュヴァンフヴィードの艤装全体を不可視の膜が包み、１６インチ砲の直撃弾を防ぐ。
『フィールド消耗率８パーセント。想定内の数値だ』
黒煙の切り裂き、シュヴァンフヴィードの主砲はル級に向けられる。
「目標先頭のル級戦艦、主砲斉射、撃て」
『撃ぇぇぇぇ!!』
５１センチ砲が放たれ、４発の砲弾は前後部それぞれ２発ずつ全弾命中、装甲を易々と貫通して内部で破壊の限りを尽くす。
前部の主砲２基が破壊され炎上、後部に命中によって機関が損傷した。
最早、戦闘能力は失われた。
攻撃がル級に向けられている間に、駆逐イ級は背に付けられた５インチ連装砲で砲撃を敢行するが、シュヴァンフヴィードの重力電磁障壁を破ることはできない。
「砲雷長、両用砲で駆逐艦を一掃して」
冷ややかな声が砲雷長に届く。
『了解。副砲、両用砲撃ち方よーい――撃ぇぇぇ！』
叩き込まれる１０門の砲火に、駆逐イ級３隻は黒青い体液をまき散らして爆散した。
残ったのは大破炎上中のル級と無傷の、同じくル級のみ。
しかし、無傷のル級は砲撃を止めて、もう一隻に並行した。
「変ですね。撃ってきません」
「……メーヴェＩ、上空から何か見える？」
『はっ！　敵艦はどうやら味方を救助している模様です』
「なら……いい。私たちは先を行く。メーヴェＩを回収後、海域より離脱する」
その時、大破したノースカロライナが大爆発を起こし、並行してい

た艦も巻き込まれ誘爆して沈んでいく。
「なんと……」
あまりの光景に副長は言葉を失う。
敵であるが、悲惨な最期を遂げた瞬間は皆同じく後味が悪いものだ。
しかし、
『メーヴェI！　ル級と思われる2名の深海棲艦を海上に確認した』
「……かんちょーいかがします？」
「……救助に向かう。内火艇を下して」
「かんちょー……はっ！　直ちに！」
「医療班の準備も」
「了解！」
こうしてシュヴァンフヴィードの海戦は終わった。
撃沈は空母1、戦艦1、駆逐3。撃墜は航空機３０機。
そして捕虜を2名であった。

ゲスト

――ネエサン！

――馬鹿者……ナゼ助ケニ来タ……ワタシニ……構ワズ離脱シロ！

――デキナイ！　私ニトッテネエサンハ――ッ！

――ッ!!　危ナイ!!

声が遠くなり、目に入ったのは知らない天井だった。白いカーテンで四方を囲まれている。背には柔らかいベッドの感触。全身がひどく痛み、視界も左半分が視えない。

「ココハ……ッ！　ソウダ私……タチハ……」

痛みの中、ル級1の記憶が蘇る。

旗艦ヲ級が沈められ、仇を討つために見たこともない戦艦に挑んだ。

駆逐艦を突撃させ、2隻の前後砲で攻撃した。

16インチの砲弾数発は確かに命中した。

けれど、爆煙の中からは無傷の敵艦が自分に主砲らしき大型の砲を向けていた。

刹那、恐ろしい砲音の後、激震と爆風が殺到して吹き飛ばされた。

防鏡の破片が肌を切り裂き、突き刺す熱さと全身の痛みで内臓をひっくり返りそうになった。

死を覚悟した。けれど、あの子が助けに来てそれから――そうだあの子は？

「あ、やっと起きたんだな」

「ッ!!」

カーテンが開けられ入ってきたのは白衣を着た妖精。

ル級1は身構えるように体に力が入るが、脇腹が痛み手で押さえる。

「あまり力を入ると傷口が開くよ。そう身構えなくても貴女には何もしない」

妖精は苦笑いしながらカーテンの外に出ていく。

何もしない？　そんなこと信じられるか！
ぎりりっと奥歯を噛み締める。
深海棲艦は今では人類の敵として世界中から敵視されている。戦闘になれば容赦なく砲撃され沈められる。
その方がまだいい。戦場で死ねるのなら、兵器としての本懐だろう。しかし、中には鹵獲され捕虜になり拷問され、屈辱の限りを尽くされながら苦しんで死んでいった者も多くいる。
「こちら医療室です。傷病人が意識を取り戻しました。はい、そうです――了解しましたお待ちしております」
妖精がどこかに連絡しているのが聞こえた。
ル級1は悪寒で身体が震える。
ああはなりたくない。何としても逃げなくては！
運がいいのか、拘束具の類はない。腕も足もちゃんとある。
掛けられた布団を跳ね除け、ベッドからなんとか立ち上がろうとするが、足に力が入らず床に転げ落ちる。
「ん？　ちょっと！　まだ立ち上がっちゃだめだ！」
妖精に手が肩に触れた瞬間、
「ウァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ッ!!」
獣じみた叫び後を上げながら妖精を押し飛ばした。
「うあっ!!」
「近ヅクナ！　近ヅケバオマエヲ殺ス!!」
額に汗を浮かべ息を荒げるル級。これ以上刺激しては彼女の傷が開きかねないと身の危険を感じた医療妖精はそれ以上近づかなかった。
「わかった。これ以上は近づかない。けど、あまり無理に動けば貴女の閉じかけた傷口が開きかげない」
妖精の言う通りル級1の脇腹の包帯が朱色の血がじっとりと滲み出ていた。
「余計ナ世話ダ……ハァ……ハァ……モウ一人ノル級ハ何処二居ル？」
「彼女なら隣のベッドで寝ているよ」

指を指した方向は同じ白のカーテンが仕切られている。
ふらつきながらも立ち上がると、仕切られるカーテンを開ける。
中には医療器具につながれたル級2が穏やかに寝息を立てている。
包帯も自分より個所が少なく、目立った外傷は見当たらない。
「ヨカッタ……生キテタノダナ……」
安どしたのかその場に崩れ、瞼に涙を貯めてそっとル級2の手を握る。
「彼女のケガは軽い火傷と切り傷、衝撃による打撲。君に比べればずいぶんと軽い。その子を守ったんだろう？　救助した時、君は彼女を抱きしめていたそうだよ」
「大切なんだね、その子が」と医療妖精は近づき微笑みかけた。
「失礼します」
「これはかんちょー殿お待ちしておりました」
びくっと反応したル級は声がした方へ振り向くと、一人の艦娘が立っていた。
紺色の軍服に白いマント。腰にサーベルを携える。被る軍帽には金の鳥と剣の刺繍。
肩で切りそろえられた白い髪に肌。美しい緋色の瞳。中性的で美男子にも見える整った顔。
勇ましくも美しい、まさに戦乙女のようだとル級1は茫然と見つめた。
「初めまして、私はウィルキア王国海軍近衛艦隊旗艦シュヴァンフヴィード。この艤装の艦長兼艦娘。貴女の名前は？」
茫然と見とれていたル級は我に返る。
「……ル級ダ」
「？　それは名称。そうじゃなくて貴女自身の名前」
「……ソンナ物ハ無イ」
そう言い視線を反らした。
「……そう」
シュヴァンフヴィードもそれ以上追求せず、彼女の傍まで歩を進める。

「……私タチヲ拷問シテ情報ヲ引キ出シ殺スノカ」
　彼女は精一杯の眼力で睨むがシュヴァンフヴィードは怖気づかず、首を横に振る。
「そんなことはしない。傷が癒えるまでは捕虜でなくゲスト。それから先は内火艇を一隻あげるから好きな場所に行っていい」
「ナゼダ？　ナゼ私タチヲ助ケタノダ？」
「……わからない」
　そう言ったシュヴァンフヴィードの瞳が困惑したように揺れる。
「私も生まれてまだ1日と立ってない。艦娘っていうのが何か、深海棲艦が何かもわからない。なんで人間の体になったことさえ。分るのは、貴方たち深海棲艦は敵。だけど貴方たちを助けた……理由はわからない」
「ただ」と続ける。
「生前、私は多くの姉妹たちを沈めてきた。だから……生きている可能性のある貴方たちを見捨てることはできなかったんだと思う」
「……ナンダソレハ……私タチハ兵器ダ！　兵器ニ情ナンテ……」
「私たちは一度沈み生まれ変わった。人と兵器の中間の存在に。たから情が芽生えても不思議ではないと思う。貴女がその子の為に泣こうとしたのはそうじゃないの？」
「ッ?!」
「その子も貴女を助けようとした。兵器だから？　僚艦だから？　違う。大切な人を助けたいと思ったから危険を顧みずに貴女を助けようとした。私は見てそう思った。だから攻撃をしなかったし、助けたと思う」
　ル級1は声を失う。ル級2を爆発から守ろうとした時も、無事かどうか心配した時も、安心して泣きそうになった時も全て嘘でなく真実だからだ。
「だから今は安静にして傷を治して」
　シュヴァンフヴィードはかがむと、顔を覗き込み右手で頬を撫でる。
「ッ?!!」

突然のことにル級は体を硬直させた。人を惑わすような妖艶の瞳がじっと見つめる。
「貴女の瞳は綺麗な瑠璃色。髪も黒く艶があって綺麗なのだから大切にして」
そう言いシュヴァンフヴィードは医療室から出ていく。
ル級1は出ていった扉を見つめ、知らず知らずのうちに頬が染まり、全身が熱くなる。
自分たちは兵器だ。冷たく無機質の鉄の塊だ。
しかし、胸の奥の、この熱いものはなんだ？
湧き上がる情動にル級は困惑していた。

「かんちょーいかがでしたか？」
医療室から艦橋に帰ってきたシュヴァンフヴィードに副長が質問した。
「なにが？」
「救助したル級です」
「う～ん」とやや考えこむように下顎に手を置く。
「見た感じは大丈夫そうだけど、私のことを怖がっていた」
「それはそうですよ」
ぴしゃり言い切る副長に目を細める。確かに自分は表情が豊かではないという自覚はあるがそこまではっきり言わなくてもいいだろうと内心思った。
「かんちょーが怖いのではなく、捕虜者は少なからず自分に何をされるかという不安があります。深海棲艦も感情はある証拠ですよ」
「そうだといいけど」
膨れたように仏頂面のシュヴァンフヴィードに副長は苦笑した。
『かんちょー……対空レーダーに感あり……数は1……高度７０００……距離９００００……速度３２０キロ方位は前方……真正面です』
「総員戦闘配置」
船務長からの報告受け、再び戦闘態勢に入る。

「偵察機かな？」
「恐らく、通常は先ほどの機動戦闘群からの応答が途絶えたために偵察に来たと考えられますが早すぎます。万が一艦娘の偵察機という可能性があるかと。ここは視認距離まで待ち、行動されてはいかがでしょうか？」
　先の戦闘から２４時間と立っていない、救援が来るにはあまりにも早い。進行方向から向かってくるということは先ほどの空母戦闘群を追撃しての艦隊の可能性が高かった。しかし、深海棲艦である可能性も０ではない。
「わかった。本艦はこのまま直進する。防空見張り員は警戒を密に」
『了解！』
「砲雷長、多目的ＶＬＳの発射用意。命令あるまで待機」
『了解であります！』

動揺

『見えた！　方位０―２―０、高度６０００、距離は……４８０００！』

数分後、防空艦橋で双眼鏡を覗いていた見張り員妖精が接近する航空機を肉眼で捉え、報告する。

「機種は？」

『……機種は……っ！　彩雲です！　間違いありません！』

彩雲とは日本帝國海軍の偵察機、つまり水上レーダーに映っているのは日本艦隊であった。

思わぬ場所であるが、友好国の艦隊との遭遇は嬉しい限りであるはずだがシュヴァンフヴィードの表情は硬い。

「如何しますかかんちょー？」

「船務長、彩雲の通信を傍受できる？」

『……少々お待ちを……周波数は解析……完了しました……チャンネルは９です』

「ありがとう」

船務長が解析した周波数のチャンネルに無線機を合わせる。

ノイズの雑音が消え、微かに声が聞き取れる。

『こちら彩雲２２。艦隊の前方３０海里の海上に見たこともない戦艦がいる』

『見たこともない？　それは深海棲艦なの？』

『いえ、そういう雰囲気では……船体は白銀、艦橋の形から大和型に近いですがそれよりでかいです』

『大和型よりも?!』

『指示を乞います――鳳翔』

『……わかりました。彩雲２２は偵察を続行してください。けど無理をしないように。対空砲が来たら退避してくださいね』

『了解。むざむざ敵の対空砲火にやられるくらいならとんずらしますぜ、お艦』

『もう、お艦と呼ばない、作戦行動中よ』

『はっはっは。了解、通信終わり』
声はノイズの波の中に消え、シュヴァンフヴィードはチャンネルのスイッチを切る。
防空艦橋から、上空の彩雲は通信の通り高高度で自分たちの監視を継続しているとの報告が入る。
通信の内容から緊張が緩む副長たちだが、シュヴァンフヴィードの気を緩まなかった。

時同じく、南西の海域に艦隊がいた。
軽空母鳳翔を旗艦とした空母戦闘群である。旗艦の鳳翔を中心に、前衛に巡洋艦1、駆逐艦3。輪形陣を敷きながら北へと進路を取っていた。
「皆さん。たった今、偵察の彩雲22から通信がありました。前方30海里に不明の戦艦を発見、艦橋の形から大和型と推定されますが、それ以上に大きいそうです」
通信を開いた鳳翔は、全艦に向け彩雲がもたらした情報を共有する。
『新種深海棲艦じゃねぇのか?』
そう言うのは天龍型巡洋艦、一番艦の天龍。言葉遣いは荒いが、根はやさしくお節介な艦娘である。主に駆逐艦の司令塔として水雷戦隊を束ねているが、実のところはお守りをするのが仕事であったりする。
『大和型以上……そいつはиспуг(驚き)だ。味方なら頼もしいが……敵なら厄介だね』
淡々とした口調で言うのは、暁型駆逐艦2番艦の響。彼女は生前、戦争終結まで生き残った数少ない艦であり、3度の損傷を受けるも沈没しないことから「不死鳥」と形容された艦娘である。戦後は賠償艦としてソ連へ。そのため時々ロシア語を混ぜながら会話する癖がある。
この艦隊では鳳翔の防空任務に就いている。
『あわわわっ大変なのです!』
あたふたとした声の主は、暁型駆逐艦4番艦、電である。

真面目ではあるが気が弱く、おっちょこちょいな性格であり、よく他の艦娘とぶつかってしまう。
響と同じく鳳翔の防空任務に就いている。
『大丈夫よ電。偵察の彩雲が対空砲を受けてないのなら敵じゃないわ。きっと米国から来た艦娘よ！』
そう言いうのは暁型駆逐艦３番艦雷。活発的な性格でこの艦隊の駆逐艦の中ではお姉さん的な存在で天龍の補佐を請け負っていた。
彼女は、不明艦が偵察機を攻撃しないことから、敵でなく遥か大陸から来た艦娘でないかと言うが、敵の海域を単艦で航行していることからやや楽観的な見解であるが、慌てふためく電を落ち着かせようとしてのことだろう。
『単艦でか？　は、ないな』
『その意見には同意だ。天龍の言う新種の可能性が高いな』
『ど、どうするのですか？』
『……そうね。戦艦級を相手にするには先手を打つのがいいけど、鳳翔さんはどう思う？』
「……もう少し……接近して目視距離で確認しましょう。通信で呼びかけて、もしも敵ならば作戦行動を中止して撤退します」
危険ではあるが全員「了解だ（なのです）（した）（よ）」と鳳翔の指示に従う。
２５海里まで接近した鳳翔の艦隊は、彩雲が発見した不明艦の目視距離まで来た。鳳翔の見張り員は地平線に薄っすらと見えるシュヴァンフヴィードを発見した。
『前方に０―２―５に艦影補足。大きさから軽空母が１、巡洋艦１、駆逐艦３の航空戦闘群。旗は旭日旗が見えます』
見張り員の報告に「本当か」と副長が聞き返すと「本当です」とすぐに応答した。
その時、船務長から前方の艦船から通信を受けていると報告が入る。
「繋いでと」と船務長に指示をしたシュヴァンフヴィードの通信機に

音声が送られる。
ノイズが交じりながら声は徐々に鮮明に聞こえてきた。
『前方の不明艦応答してください。こちらは日本帝國海軍単冠湾鎮守府第一艦隊空母戦闘群旗艦鳳翔です。貴艦の所属を答えてください。応答無き場合は、貴艦を深海棲艦とみなし、攻撃を加えます。繰り返します応答願います』
「こちらはウィルキア王国海軍近衛艦隊第一艦隊旗艦シュヴァンフヴィード。当艦に交戦の意思はない。母国に帰還中に際すため速やかに進路を譲られたし」
『……もう一度聞きます。どこの国の所属と言いました？』
「ウィルキア王国。貴艦の国、日本帝國とは同盟国のはずでは？」
『申し訳ありませんが存じ上げません。お国はどちらに？』
「オホーツク海、サハリン島より西の湾岸」
『その場所に国があることはありません。何かの間違いでは？』
冷や水を掛けられたように血の気が引き、シュヴァンフヴィードは額に手を当てる。
「かんちょー!?　大丈夫ですか！」
「……ええ」
乱れる呼吸を整え、通信相手の鳳翔とか言う艦娘が母国――ウィルキア王国の存在を認知していないことを冷静に思案する。
工業が盛んなウィルキアは日本の近隣の国であり、友好国だ。
その存在自体を知らないことはありえない。
だとすれば、意図的に隠しているのか？　何のために？
「かんちょー……先方は何と言ってきたのですか？」
「……母国ウィルキアは存在しない……って」
「そんな……まさか?!」
流石の副長も声を上げ驚く。
可能性はあった。転生したからって元の世界とは限らない。航海中に過ぎったことではあったが、極力考えないようにはしていた。
でなければ……自分たちはどこに帰ればいいのわからなくなって

しまう恐れがあった。危惧していたことが現実になってしまった。
「……どうしよう……母国が……ウィルキアが無いのなら……私はどこに向かう……どこに帰ればいいの……どこに……」
悲痛を帯びた、けれど消えてしまいそうな声に副長は息を飲む。
シュヴァンフヴィードは平静を保とうとするが動揺を隠すことはできないでいた。目的地を、生まれた故郷をなくしてしまった彼女は、自分の存在を示す唯一の証を失ったに他ならなく、精神に及ぼす傷は深かった。
目の前が歪み、瞳から溢れ出た雫は頬を伝い流れ落ちていた。
『どうしました？　応答してください』
「……」
通信機から聞こえる鳳翔の声は聞こえ、空しく通り過ぎて行く。
「かんちょー！　しっかりしてください!!」
叱責するような声が聞こえ、びくっとして振り向く。
「指揮する貴女がしっかりしなければ、我々は混乱の末にバラバラになります。お気持ちは察し致しますが、ここは冷静に……冷静になって……ぐださい……うぅ……」
「副長……ありがとう。心配かけてごめん」
泣きながらも支えてくれる副長の言葉で、シュヴァンフヴィードは冷静さを取り戻す。
そうだ私は彼女たちを艦長なのだ。どんなときも冷静な判断を下さなくてはいけない立場なのだ。自分だけが悲しいのではない。一部である彼女たちも同じように目的地と故郷を失ったのだから。
「こちらシュヴァンフヴィード。双方との認識の違いが大きいと思われる。詳しい情報を知る為に艦載機で貴艦への着艦を希望する」
『わかりました。こちらも貴女の事が知りたいです。着艦を許可します。お待ちしております』
通信を終え、エレベータの扉に向かう。
「副長、ちょっと行ってくる。艤装のことお願いね」
「はいっ!!　お任せくださいっ!!」
エレベータに乗り込み、1階の通路を進んで格納庫まで歩いてい

く。

接触1

「皆さん。不明艦からの応答がありました。どうやら敵ではないようです」
『そうなのですか？　よかったです』
『敵じゃないならどこの国のだよ？　米国か？　ソ連か？』
「いえ、相手方はウィルキア王国海軍の近衛艦隊旗艦といいました。名前はシュヴァンフヴィードと」
『聞いたことない国ね』
『シュヴァンフヴィード……響きからドイツ艦なのか？』
『響だけにか？』
『……』
「くっくっくっ」と天龍は笑い「そういうつもりじゃない」と響きは不機嫌そうに言うと険悪な空気に包まれる。
『こら、天龍からかわない！』
『け、けんかはだめですよ』
わいわい、がやがやと緊張感無く騒ぎ立てる僚艦たちに「静かに」と鳳翔が低い声音を発すると、鎮火したように静かになる。
静寂を見計らい、しゃべりだす。
「どうやら相手は母国に帰還中らしいです。しかし、ウィルキアはオホーツク海西部の海岸にある国家だと言うのです」
『あそこはソ連の領土だ。国なんてないはず』
「響さんの言う通り、国は存在しません。しかし、嘘を言っているようには聞こえませんでした」
通信でのやり取りでの沈黙。微かに聞こえた嗚咽染みた声に鳳翔はそう思っていた。
『じゃあ、なんだ？　俺たちが知らない艦娘ってか？』
「可能性は高いかと。相手は情報の違いに困惑していました。そのためか情報を交換するように乗艦を求めてきました」
『どうぞって返事したんだろ？』
「はい」

『はぁ～鳳翔さんは相変わらずだね』
『危険じゃないのですか？』
『私もそう思う』
　確かに所属が不明の艦娘を艤装内に、それも艦隊旗艦に乗艦させるには、あまりにも危険性が高い。しかし、鳳翔は先のやり取りで敵意はないと確信していた。
　もし、あるのなら律義に応答などしなし、醜悪な思考の持ち主ならならこの瞬間にも砲弾の雨が降り注いでいるはずだ。
「前方の戦艦から……あれは……回転翼機?!　本艦に接近してきます！」
　見張り員の驚きの声が上がる。回転翼機とは現代でいうヘリに該当する。前世でもカ号観測機と呼ばれるオートジャイロが日本軍に存在した。
　けれど、見張り員が見たものはそれよりも大型で、速度も艦載機並みに速く、ぐんぐんと近づいてきたことがさらに驚愕に拍車をかけた。
　無論、鳳翔、含む僚艦の艦娘も驚きを隠せないでいた。

　時計はやや遡り、シュヴァンフヴィードの姿は格納庫でなく、医療室にあった。
　鳳翔の艤装に乗艦する前に、ル級1に今の状況を話、動揺さえない為である。
「たった今、艦娘の艦隊と接触した。けど、貴方たちのことは極力話さないことを約束する」
　ベッドに戻ていたル級1は神妙な顔で「ワカッタ」と頷く。
　隣を仕切っていたカーテンは開けられ、反対側のル級2の意識を取り戻したのか、オロオロとした視線で二人を交互に見る。
「もちろん、受け渡しを要求してきたら私は拒む。だから安心してほしい」
「ソレヲ私タチニ信ジロッテイウノ?!」

噛みつくようにル級2は声を荒げる。
「ヨセ、私ガ納得シテイルンダ」
「ネエサン！　艦娘ノ言ウコト信ジルノ?!」
まさか。自分が人質にされてしまっているのかと察したル級2は殺意をこもった目でシュヴァンフヴィードを睨む。
「卑怯者！　オ前タチハソコマデ卑劣ナノカ！」
「何をどう想像したかはわからないけど、私は貴女が寝ている間に、貴女のお姉さんと話をしただけ」
「私ヲ人質ニシテ拷問シタノカ?!」
「尋問も拷問もしてない」
「嘘ダ!!」とベッドから飛び上がりシュヴァンフヴィードに掴みかかる。
どうやらル級1に巻かれた包帯の量を見て言っているのだろう。
彼女のそれは妹を守って受けたものであり、愛情の証のはずであるが、興奮しているル級2は冷静な判断ができないでいた。
「ヨセ！　コノ傷ハ拷問デ受ケタモノジャナイ。彼女ノ言ウ通リ、拷問モ、ソレデコロカ尋問スラ受ケテイナイ」
「ソンナ……嘘ヨ」
「本当ダ。コノ傷ハ爆発ノモノダ。助ケテクレタドコロカ、私タチヲ捕虜トシテデハナク、ゲストトシテ扱ッテクレテイル」
呆気にとられたル級2は、シュヴァンフヴィードを掴んでいた手を放す。衣服を整え、シュヴァンフヴィードは微笑む。
「今は信じてくれなくていい。ただ貴女のお姉さんに言っていることだけは信じてあげて。自分の事よりも貴女の事を心配していた彼女を」
ううっと嗚咽を漏らすル級2に背を向け、踵を返すと医療室の扉をくぐって外に出ていく。
通路まで響く、鳴き声を聞きながら、今度こそ格納庫に向かって通路を進んでいく。
いくつかの区画を通ると、ひときわ広い空間に出る。なかでは先ほど回収した無人偵察機メーヴェの洗浄と整備に、整備員がいそいそと

動き回っていた。一人が「かんちょー殿?!」とすっ飛んだ声を上げると、至る所から視線を浴びせられる。
「全員集合！　かんちょー殿がお見えになられた！」
だだだっと作業を中断した妖精はその場で直立すると「敬礼と！」と声に合わせ、一糸乱れぬ動きを見せる。
シュヴァンフヴィードは敬礼を返し、「作業を続けて」といい蜘蛛の子を散らすように作業に戻る。
その中で一人だけ近づいてきた妖精がいた。
上下を半袖のシャツと短パンを履き、顔や手がオイルと油で汚れている。
「初めましてかんちょー殿。私が整備長であります。出頭できなく申し訳ありませんでした。後、このような姿で失礼します」
「気にしないで。その汚れは職務をしている証だから」
「恐縮です。ところで前方の日本艦隊の空母に乗艦されるのですね？」
見透かしたように言い当てた整備長。大方、副長辺りが先に連絡していたのだろうとシュヴァンフヴィードは苦笑した。
このような状況でも職務を全うしてくれる辺りを見習わなければいけないなと同時に感謝した。
「そう。ヘリを飛ばしてくれる？」
「了解です。すでに甲板エレベーターに乗せ、搭乗後いつでもいけると航空機長が連絡してきています」
整備長に促され、ヘリが待機してある場まで行く、すると搭乗員らしき妖精と防弾ベストにヘルメット、手には自動小銃携え、完全武装した妖精が４人整列している。
「お待ちしておりましたかんちょー。自分が航空機長のです。出頭せずに申し訳ありませんでした」
「いい。それよりその４人はなに？」
「はい、彼らは航空降下妖精と言いまして、ヘリから降下して要人の救出や救助などを主任務にした妖精であります。今回はかんちょー殿の護衛として随伴させたいと思います」

ふんっと鼻息荒げに言う。
額に手を当て、ため息をつき、流石にそれは用心し過ぎではないだろうかとシュヴァンフヴィードは思う。
彼らは真剣に考えているのだろうが、武装した小集団が相手の旗艦に乗艦したならば、最悪戦端の引き金になりかねない。
しかし、無下にはできずヘリの護衛のみと条件を付けた。
「しかし、万が一かんちょー殿身に何かあったら……」
「その時はその時に何とかする。行き当たりばっかりかもしれないけど、私たちが頼み、向こうは快く了承してくれた。そのことを考えて」
「は、軽率な行動をして申し訳ありません」
「貴女が悪いわけじゃない、そういうこともあるのだと気に留めておいて。それじゃ行こう」
「はっ！　全員搭乗！」
航空降下妖精が扉をスライドさせ、シュヴァンフヴィードは促させるまま機内に乗り込む。全員が搭乗するとエレベーターは甲板まで上昇した。
「こちらクレーベⅠ。発艦準備に入る」
航空機長は慣れた手つきで、スイッチを押していく。
４枚の羽根が徐々に回転していき、ブンブンブンっと空気を切り裂く音が鼓膜に響く。
「エンジン出力よし、各部異様なし。クレーベⅠ発艦する」
クレーベⅠは甲板から浮き上がると、高度を上げ、日本艦隊の軽空母鳳翔の甲板まで直進していった。

接触2

数分の空の旅を終え、シュヴァンフヴィードと４人の妖精を乗せたクレーベⅠは第１航空戦闘群旗艦、軽空母鳳翔の艤装甲板に着陸した。

甲板に降り立つと、クレーベⅠのメインローターの風圧で軍帽が飛びそうになり、右手で押さえる。甲板を見渡すと、武装した妖精４人が降りてきたため甲板員は警戒して固まっていた。

そこへ、一人の女性が艦橋から出てくる。艦娘の鳳翔だ。

薄い紅色の和服を動きの邪魔にならないように袖をタスキで縛り、紺色の袴を履いている。長い髪をポニーテールにしている。

おっとりとした顔立ちが印象にのこる人だ。

メインローターの風圧を背に、鳳翔が立つ場所まで４人はいことすると、シュヴァンフヴィードは呼び止め「ここで待っていて。何かあったら通信で呼んで」と護衛の妖精に厳命していく。

しぶしぶではあるが艦長の命令に「了解」と答えた。

これは、こちらが情報共有を提案しておいて武装した者を連れて行くのは礼儀に反するとシュヴァンフヴィードの矜持に反するからだ。

そしてもしも、鳳翔がこちらを危険とみなして拘束するなら移動手段のクレーベⅠを押さえてしまえばそこで終わりだ。そのために４人を待機させ異常時は彼女らだけでも速やかに退避させようと算段していた。

「ウィルキア王国海軍近衛艦隊旗艦シュヴァンフヴィードです。当艦への乗艦を許可していただき、感謝します」

「日本帝國海軍第１２空母戦闘群旗艦鳳翔です。こちらこそ乗艦していただき感謝しています。ここではなんですので艦橋までお越しくださいませんか？」

「わかりました」

「ではこちらです」と先導する鳳翔に付いて、艦橋と甲板を繋ぐ扉をくぐり、狭い階段を上り、艦橋内に入る。周囲を見渡すと、内装から電子機器の類が古いことに気が付く。

用意したのか木製のテーブルと椅子が用意されており、鳳翔は着席するように促し、シュヴァンフヴィードは椅子に座る。
周りには妖精が囲むようにしていて、まるで尋問される側だなとシュヴァンフヴィードは感じた。
互いに向き合い、緊張するの中、話の発端を開いたのはシュヴァンフヴィードだった。
「まず初めにこちらから質問させてもらってもいいですか？」
「はい」
「先ほど通信で貴女が仰いました、私の祖国、ウィルキアを存じないと言うのは本当ですか」
「はい、本当です。この世界にはウィルキアという国は恐らくですがありません」
鳳翔の表情から嘘ではないと読み取ったシュヴァンフヴィードは落胆したが気持ちを切り替える。今は、落ち込んでいい時ではない。
「次はこちらからよろしいですか？」
「どうぞ、答えられる範囲でなら」
「貴女はアルフォンシーノ方面から来ましたね？」
アルフォンシーノ方面？　おそらくアリューシャン方面の事だろうとすぐにわかり頷く。
「実はアルフォンシーノ方面は深海棲艦の勢力圏です。貴女はどこから祖国を目指してきたのですか？」
「北緯５７度３０分、東経１７６度１７分、ベーリング海海上で私は艦娘として目覚め、祖国を目指して南下していました。約２４時間前です」
「２４時間前！　実は私たちは深海棲艦の艦隊を追撃中に、貴女に遭遇しました。その敵艦隊と遭遇しましたか？」
「はい、遭遇し、戦闘をして全艦を撃沈しました」
「お一人でですか?!　戦艦級２隻を含んだ航空戦闘群を?!」
「そうです」
鳳翔と取り巻きに妖精たちは顔見合わせながら驚いた。
そして戦慄した。目の前の艦娘は単艦で、航空戦闘群と渡り合える

戦力であることに。
もしも、その矛先が、自分たちに向けられたことを想像した鳳翔の額から一粒の汗が流れ落ちた。
「被害のほどは？」
「皆無です。私は航空戦力に対抗するための手段を持っています。貴女の国では、三式弾でしたか？　その類を装備しています」
「……そうですか。遅れながらお礼を申し上げます」
鳳翔は深々と頭を下げる。
「鳳翔さん、よければ貴女の知っている範囲でこの世界のことを教えてもらえませんか？」
「わかりました」
数十年前。突如として全世界の海域に現れたなぜの生物。彼らは沿岸部の都市や、通商船などを無差別に攻撃し、世界は一時に混乱を来すも、結束、連合軍を組織。この謎の生物の呼称を深海棲艦として戦うこと宣言した。
しかし、湯水の如き湧いてくる深海棲艦に連合軍は終わりが見えない泥沼の消耗戦に突入した。開戦から2年が立つ頃には各国は、自国の防衛に専念し、連合軍は解散。
それ以降、徐々に深海棲艦たちに海域と空域を奪われ、各国への通信網は切断され、孤軍奮闘状態で戦闘を強いられ、すり潰されていった。
開戦から１０年、海域を偵察していた巡視艦が少女が操る軍艦を発見。深海棲艦に効果のある装備を操る戦艦の少女たち。
彼女たちを艦娘と称し、各国は全海域で艦娘を捜索して深海棲艦との戦闘に投入。被害を出しながらも深海棲艦の勢力を押し返すかと見た。が、艦娘に対抗するかのように人型の深海棲艦が出現。
艦娘同様に戦艦を操り、人間のような戦術を使い始めた。
そして一進一退の戦況が今日である。
「私たち日本帝國もできるだけのことをしています。けど、戦況は芳しくありません。南は小笠原、北は択捉までの海域を防衛するのに精一杯の状況です」

「……わかりました」
世界情勢を聞き終え、シュヴァンフヴィードは深い息をついて整理していく。
深海棲艦は十数年前に世界各地の海域から現れた。
各国は団結するも疲弊して2年で空中分解。空域を制圧された地域とは連絡が取れないことから、電波妨害が可能と推測される。
艦娘が現れてから巻き返すも、近年になって人型、ル級1たちのような存在が確認され膠着状態と。
厳しい世界に転生させられてしまったものだと天井を仰いだ。
「もし、行く当てがないのなら、日本に来ませんか？」
見計らったように鳳翔は提案してきた。
「日本にですか……」
「貴女の国はありませんけど、生前は同盟国と仰いました。我が国に落ち着くのも一つの手かと。その時は手厚くもてなすと思います」
つまるところは自分という戦力が欲しいのだろう、察したが行く当てもなく海を彷徨(さまよ)うことは乗組員たちに申し訳が立たない。
敢えて、自分から言うことでこちらに選択肢を与えないことから彼女たちも必死なんだろう。
「わかりました。その申し出お受けします」
「本当ですか?!」
「はい、日本にお世話になろうと思います」

鳳翔との会談を終え、艤装に帰還したシュヴァンフヴィードが向かったのはやはり医療室であった。
やや疲れがたまっていたが、彼女たちにも重要な決断を自分は下してきてしまった。
後に回すことはできなかった。
医療室に入ると、シュヴァンフヴィードを待っていたかのように2人は一つのベッドに座っていた。
「カエッテキタカ」

「驚いた。もう包帯が取れたんだ」
「アア……妖精ノオカゲダ」
「そう。よかった」
「……実ハオ前ニ話ガアル」
　神妙そうに顔をしかめる二人に、シュヴァンフヴィードは「なに？」と優しく答える。
「オマエハ言ッタナ、傷ガ癒エタラ開放スルト」
「ええ」
「ソノコトナノダガ……ワタシタチハカエレナイ」
「なぜ？」
「……旗艦ヲ失イ、アマツサエオ……貴女ニ、艦娘ニ助ケラレ帰還シタナドト知ラレレバ……ワタシタチハ殺サレル」
　微かに震える彼女は妹に抱きしめられながら続ける。
「ダカラ、ドウカ私タチヲココニ居サセテ欲シイ！　知ッテイル事ハナンデモ言ウ。雑用デモナンデモスルダカラ……頼ムッ！」
「私モナンデモシマス！　ダカラ居サセテ下サイ！」
　頭を下げ2人は懇願する。
　そんな2人にシュヴァンフヴィードは微笑みながら答えた。
「私は言いました捕虜でなくゲストだと。帰るのが無理ならここに居ても結構です」
「本当カ?!」
「はい。しかし、私たちは日本に行きます」
「日本ニ？」
　2人は顔を見合わせる。
「最初の目的地、祖国ウィルキアが無いと知りました。このまま当てもなく航海を続けるより一度腰を落ち着けるところに居座ろうと思います。けど約束する――貴女たち2人を決して受け渡しはしないと」
　強い声音で言い切るシュヴァンフヴィードに心打たれたのか、ル級1の瞳がキラキラと涙で光る。
「ワカッタ。貴女ヲ信ジル。ダカラゲストトシテデハナク私タチヲ僚

艦ニシテ欲シイ！」
「私モネエサント同ジデス！」
「わかりました。貴女２人を私の旗下に加えます、ようこそ我が艦隊へ」
差し出されたシュヴァンフヴィードの右手を２人は両手で強く握りしめた。

単冠湾鎮守府1

北方方面防衛の要所、単冠湾鎮守府。
択捉島のほぼ中心に位置する、直径約11キロの湾内には10数隻に及ぶ艤装が停泊することが可能で要所足りる風格を見せる。
しかし、相次ぐ深海棲艦の空襲により、現在の稼働が可能な艤装は実施上4割であった。
先の空襲で破壊させた施設の残骸の撤去、修復に艦娘と妖精、そして彼女たちを束ねる提督、三島大樹少将は躍起になっていた。
彼は空母戦闘群を指揮する機動戦術を得意とし、幾度となく深海棲艦の猛追から帝国を防衛してきた兵（つわもの）である。
が、幾度となくの命令、司令無視などの独断行動を取ることから、一部の官僚からは煙たがられている。
それは、彼の艦隊運用信条が、臨機応変、見敵必殺をとしているためである。
自分勝手ではあるが、戦果をあげているため、厄介払いを込めて辺境の北方方面最重要拠点の一つ、単冠湾鎮守府に配属されていた。
「提督、被害状況の確認が終わりました」
艦娘、大淀が提出した資料に目を通すと、深いため息を大樹は吐く。
「湾内に駐在中だった空母艤装3隻が大破、うち2隻が炎上して湾内に轟沈。戦艦艤装2隻が大破、巡洋艦艤装2隻と駆逐艦艤装4隻が小破。入渠中の長門の艤装にも被害……艦載機の損失は約150機……死傷者妖精が800名、艦娘加賀に蒼龍が意識不明の重体。重症に榛名と霧島。その他多数か」
「はい、工廠にも空襲を受けましたが施設機能に支障が無いのが幸いです」
「そうだな、しかし、人的被害は大きい。武器が在っても使える者いなければ意味がない」
「……そうですね」
この空襲で、主力空母加賀、蒼龍の2名の艤装を失ったのは、予想以上の痛手であった。

深海棲艦空母戦闘群は小規模ながら、明け方の完全な奇襲により、空母艤装3隻を轟沈せしめた。
これにより、兼ねてより計画していたアルフォンシーノ方面への進行が大幅にその期間を延長せざるを負えない。
まさか……そのことをしっての、最小戦力による奇襲なのか？
考えを打ち破るように指令室の扉が開かれる。
駆けこんできたのは、通信妖精であった。
「報告します！　第1艦隊航空戦闘群旗艦鳳翔より入電です」
「読んでくれ」
「はっ！　我、作戦を中止し、母港に帰投す。尚、追撃の途中、艦娘を発見。敵の空母戦闘群は彼女が殲滅。共に帰投する、以上です」

1日を得て、鳳翔率いる第1艦隊航空戦闘群とシュヴァンフヴィードは深海棲艦の襲撃もなく、艦隊は帝國領海内に入ることができた。
その短い時間で、シュヴァンフヴィードは妖精たちに現状とこれからの方針を説明した。
多くの妖精たちが、祖国が無いことに悲しんだが、みな涙を飲み込んでシュヴァンフヴィードに付いていくと了承した。
『鳳翔より発光信号……ワレニ、ツヅキ、湾内ニ、入ラレ、タシ……以上です』
鳳翔の艦橋から光信号が、発せられ、シュヴァンフヴィードは後に続く。
『前方に、艦影……空母2、戦艦3、巡洋2、駆逐艦4……損傷している艤装が殆どです』
見張り員の報告に、傍らにいるル級1が苦い顔をする。
僚艦になったことから彼女たち2人を艦橋内に立ち入ることをシュヴァンフヴィードは許可していたからだ。
「ココヲ攻撃シタノハ私タチデス。命令デ、敵ノ拠点ニ居ル空母ヲ奇襲シロト言ワレマシタ。作戦ハ成功……帰還途中ニシュヴァンフヴィード旗艦ニ遭遇シマシタ」

「そう。でもそれは命令に従って行ったこと。気に病むことじゃないと思う」
「……ハイ、アリガトウ御座イマス。シュヴァンフヴィード旗艦」
　気を遣ったのではなく、シュヴァンフヴィードはただ真実を述べた。彼女たちは命令を自行しただけであって何ら非を感じることは無いのだから。それよりも……。
「そのシュヴァンフヴィード旗艦って言うの……何とかならない？」
「イケマセンカ？」
　困った顔をするル級1に「そうじゃないけど」と口を濁らせる。
　なんだかこそばゆい感じがして仕方なかった。
「しかし、よくあれだけの航空隊でこれほどの被害を与えましたな」
　辺りを見渡した副長は双眼鏡から目を話とル級たちに振り向く。
「念入リニ練ラレタ作戦デ、攻撃目標ガ定マッテイマシタ。迎撃機ガ飛ビ上ガル前ニ攻撃ヲ加エ離脱シマシタ」
　副長の問いにル級2は答えた。
　一撃離脱の攻撃でこの損害を与えるとなると、あの異形航空機は余程性能がいいのかと副長は思ったが、自分たちの敵ではないとも感じていた。レシプロ機並みの速度などシュヴァンフヴィードに搭載された火器管制装置の前では止まっている的を射抜く程、容易いことだからだ。
『かんちょー……鳳翔より……通信……です』
「繋いで」
『こちらは鳳翔。シュヴァンフヴィードさんは私たちと共に司令部に出頭していただきますか？』
「わかりました。艦載機での着陸は混乱を起こす恐れがあるため、内火艇で向かいます」
『気遣いに感謝します、では』
　通信が切れると、シュヴァンフヴィードはエレベーターに向うとするとル級たちも続いていく。
「なんでついてくるの？」
「イ、イケマセンカ？」

目を潤ませた子犬の2人にため息を吐く。
鳳翔には艦隊は殲滅したが、ル級たちを救出したことは伏せてあった。もしも話して、鳳翔が拘束に踏み切る可能性が無きにしも非ずであったし、誤解を招くことはしたくなかった為である。
それなのに敵の、あまつさえ自分たちが攻撃した鎮守府の敷居を共にまたごうとしている図太い精神に感服すら覚えた。
「貴方たちを連れて行けば、誤解を招く可能性がある。だからここで待機」
「ソンナ?!」
「私タチモオ供サセテ下サイ！　シュヴァンフヴィード旗艦！」
「貴女ナニカアレバ今度コソ私タチハ……行キ場ヲ失ッテシマウ……ダカラ！」
必死に懇願する2人に首を横に振り、肩を落として消沈する2人にシュヴァンフヴィードは微笑む。
「貴女たちを連れて行けば、相手を刺激してしまうかもしれない。だから、ここにいてほしい。大丈夫、私は帰ってくるから」
そう言い残して、エレベーターの扉が閉まっていく。
閉まる直前、ル級1、2は「如何カゴ無事デノ帰還ヲ!!」と敬礼していた。

「どこの艦娘？」
「すごく大きい！」
「白くてきれいだな～」
港には大勢の妖精が復興の作業の手を止めていた。港湾に現れた1隻の艤装にくぎ付けになっていたからだ。
純白の流体的な船体に、2連装の巨砲。日本製の艦橋で、大和型よりも高い。その存在感は、人の目を釘付けにする気品を併せ持っていた。
「なんてきれいな艤装……」
「確かに。黒鉄の城――いや、まさに白鉄の城だな。あんなものは初めて見た」

港まで出てきた大樹と大淀は思わず感嘆の声を漏らす。
少しして、内火艇で第1艦隊航空戦闘群の面々は集まる。
その中に、紺色の軍服にマントを纏った少女が、あの艤装の艦娘なのかと大樹は気づいた。
「旗艦鳳翔以下、第1艦隊航空戦闘群帰還致しました」
「ご苦労鳳翔。偵察中に追撃の任務を出し、済まなかった」
「いえ……それで損害は？」
「ひどいものだ。空母艤装2隻が湾内の藻屑とかした」
「そんな……あの子たちは?!」
「加賀と蒼龍が意識不明の重体。龍驤は司令部に居たから何ともないが……」
「あの子たちが……」
鳳翔は崩れ落ちるようにその場に座り込む。電と雷に響は心配そうに鳳翔に寄り添う。
「天龍。鳳翔宿舎に運んだ後でいい、報告書を提出してくれ」
「ったく、しゃあない……龍田無事か？」
「ああ、軽いケガだそうだ。みんな宿舎に居る」
「了解だ……鳳翔さん立てるか？」
「……はい」
か細く消えそうな声で返事をした鳳翔を天龍は手を貸し、4人は宿舎に歩いて行った。
「それで君が、鳳翔の言っていた艦娘か？」
残された艦娘に大樹は向き合い問う。
「そうです。私はウィルキア王国海軍近衛艦隊旗艦、次世代試作戦艦シュヴァンフヴィード級1番艦シュヴァンフヴィード。以後お見知りおきを」
ゆったりとした動作で、シュヴァンフヴィードは敬礼した。
緋色の瞳は射抜くように、大樹に向けられていた。

単冠湾鎮守府2

司令官の大樹は連れてくる艦娘がいると宿舎に向かい、シュヴァンフヴィードは大樹の傍らにいた艦娘、大淀に案内され応接室に通された。

何人も付ける長いテーブル、壁は豪華な装飾が施され、カーテンに至っても高級感がある。

椅子に座り待つこと10分、大樹は4人の艦娘を伴って入ってきた。

その中に、鳳翔の姿が見受けられたが、泣いていたのか目が充血している。

シュヴァンフヴィードは起立した。

「お待たせしてすまない」

「いえ、こちらこそお忙しい身でありながら時間を割いていただき感謝します」

「客人を粗末に扱ってしまったら帝國軍人の面目が潰れる。ましてこんな美人を蔑ろにする奴はナンセンスだ」

「はあ……」

「掛けてくれ」と促され椅子に腰を下ろす。大樹はシュヴァンフヴィードの対面に座り、4人の艦娘はそれぞれ左右に座る。

大樹は顔の前で手を組み、唇に宛がう。まるで値踏みをされているようだとシュヴァンフヴィードは感じた。

「私はこの単冠湾鎮守府の司令官、三島大樹、階級は少将を拝命している。まずは、敵艦隊を殲滅してくれたことに感謝する。ありがとう」

「礼を言われることではありません。偶然遭遇して戦端が開いただけですから」

「それでも、だ。少なからず私たちは多くの人材と艤装を失ったからな。それで君の所在だが、ここに来る前に鳳翔に少し聞いた。なんでも存在しない国の戦艦らしいね」

「はい。私の祖国ウィルキア王国は択捉島より西のオホーツク海近隣を領土にした海洋国家です。主に工業を主体として、造船業は世界で

も1、2ぐらいでした」
　大樹は納得したように頷く。艦娘の艤装は生前の船体が基礎になっている。シュヴァンフヴィードの艤装を一目見ただけでも、造船業が秀でた国の物だとわかるからだ。
「祖先はアイスランドから新大陸に渡ったデーン系部族の1つ、ヴィルク族。長く帝政ロシアの支配下でしたが19世紀末のクリミア戦争を期に、欧州各国の援助を受け独立しました。再侵攻の時には隣国の日本と共同して向かい撃ち撃退します。それから欧州大戦で共和制ドイツを援助し建立。それ以来、イギリス、ドイツ共和国、日本帝國は同盟国でした。しかし、ある日クーデターが起きました。私はクーデター派の旗艦として就役しましたが、私のより巨力な艦が建造されたことにより、入渠していました。クーデター派はその勢いに乗り世界に宣戦布告、世界を巻き込みながら戦い約1年で戦争はクーデター派の負けで終わりました。それからは近衛旗艦として就役し、10数年後にベーリング海にて撃沈されました。それがウィルキア王国と私の軌跡です」
「……なるほど」
　突拍子ないことだがシュヴァンフヴィードの言っていることに嘘が含まれているとも思えない。しかし、大樹の中では微かに深海棲艦ではないかという疑心がぬぐえないでいた。
　ここに来る前に見せた、底知れぬもの含んだ緋色の瞳が大樹にそう思わせていたからだ。
「うちからも質問ええ？」
　挙手したのはこの鎮守府古参艦娘の龍驤。その容姿は先の駆逐艦の子のように小柄ではあるが鳳翔の同じ軽空母である。
「どうぞ」
「ほな、質問するで。鳳翔が追っとった艦隊全滅させたんだってな？
　単艦でどうやったんか気になってんねん」
「私の艤装には対艦ミサイルが装備されています」
「み、みさいる？」
　聞きなれない言葉に龍驤は目をパチクリさせる。

「日本名では誘導墳進弾と言います。私に搭載されているのは水上レーダー内が射程で約８０キロ、ですが偵察機からのレーザー誘導しますと１００キロは超えます」
「ひゃ、１００キロ?!　なんちゅうもんもってんよ！」
「それで艦載機を発艦させた空母を３本で撃沈。残る駆逐艦と戦艦は主砲と両用砲で殲滅しました」
　呆気にとられたように場の空気は静まり返る。
「はぁ～ぶっ飛んでるなきみぃ……」
「私からもいいか？」
「どうぞ」
　次に挙手をしたのは戦艦の長門だ。彼女は鎮守府の第１戦隊であり、その強気な性格と先見性から艦隊の旗艦を任せられている。
「話を聞くに、すでに敵艦載機は発艦し終えているように聞こえたが？」
「はい、艦載機は発艦して向かってきました。約３０機ほど」
「それにしては艤装がきれいすぎる。例の誘導墳進弾で撃墜したのか？」
「いえ、ミサイルには限りがあり、高価なものですからこの程度の規模の航空機群に使用しません」
　３０機の編隊をこの程度と称す、シュヴァンフヴィードに長門は目を見開く。
「この程度……ではどうやって無傷で撃墜したんだ？」
「私の主砲５１センチ５０口径砲の弾種に３式弾に類似したものがあります。それを使用しました」
「５１センチ５０口径?!　そんなものを積んでいるのか！」
「はい。そこから逃れた敵は両用砲で撃墜しました。弾頭は近接信管を組み込んでいるため、命中せずとも爆風で機体を破壊します」
「近接信管?!　貴艦の対空砲弾は全てそれなのか?!」
「全てではありませんが、大体と思ってくれていいと思います」
　規格外のであるとは予想していたが、まさかここまで規格外とは。
　同じ戦艦艦娘でありながらその戦闘力は自分たちを遥かに凌駕す

るのかと長門は尊敬と畏怖を混ぜた瞳でシュヴァンフヴィードを見る。
「まさかそれ程とは……君の祖国ウィルキア王国は随分進んだ技術先進国のようだね」
「そうでもありません。この技術は世界でも多くの姉妹たちに実装されました」
「つまりは貴女だけでなく、他の艦も装備されていたのですか?!」
「その通りです」
淡々と答えるシュヴァンフヴィードに鳳翔も流石に驚きを隠せなかった。
生前、未完成の兵器、発展した兵器を搭載されたシュヴァンフヴィードは最早、自分たちとは違う存在のように感じられた。
「……」
「なるほど。確かに君は私たちの知っている艦娘とは違うようだ。しかし、帰順する場所はないならこれからどうするつまりだ?」
「その点は鳳翔さんの提案で貴軍に助力したいと思っています」
「それはありがたいが申し出だ。しかし、私たちは君が知っている日本帝國軍ではない。それでもいいのかね?」
「例え、私のいた世界と今ある世界が違っても、同盟国の惨状を傍観しては祖国のウィルキア近衛艦隊旗艦の名折れです。どうか貴軍に協力させていただきたい」
軍帽を取り、シュヴァンフヴィードは深々と頭を下げる。
「わかった。こちらとしても戦力が増すことに異論はない。君は客人艦娘として向かい入れよう」
「ありがとうございます、三島閣下」
立ち上がり、シュヴァンフヴィードは敬礼をした。

「さて、諸君はどう思う?」
シュヴァンフヴィードが応接室から退室し、残った4人に大樹は問う。
「うちは向かい入れるのに賛成やな。今の戦力じゃどのみち次の襲撃

に耐えられるか怪しいしな」
「同感だ。航空戦闘群を単艦で殲滅できる戦力があるのなら鬼に金棒、十分な戦力増強になる」
「本当にそうでしょうか？」
　シュヴァンフヴィードを迎えることに賛成な長門と龍驤に水を差したのは鳳翔だ。
「なんや鳳翔、なんか心配があるん？」
「確かに戦力の増強は今の私たちにとって嬉しいことです。私もここで会う前に、話も直接しています。けど……あの瞳が、時折恐ろしく感じられます」
　鳳翔は俯きながら言う。大樹も同じ考えであった。あの緋色の瞳はどこか魅了しるようで、冷酷さを合わせ待つように思えていた。
「もしもあの方の言うことが本当なら……私たちは懐に制御が聞かない猛獣を引き込むことになりかねないのでは、と思うのです」
「考えすぎちゃうの？　現に深海棲艦を倒したんやろ」
「本当にそうか？」
　それは今まで口を開かず、シュヴァンフヴィードに若干の警戒心を寄せていた艦娘の木曽であった。
「深海棲艦を殲滅した場所を鳳翔さんは見たのか？」
「いえ……彼女がそう言いました」
「なら俺はあいつを信じることはできない。言葉巧みにこちらに紛れ込んだ深海棲艦側の密偵と取るべきだ」
「……確かに木曽の意見にも一理あるな」
　長門は頷く。「それは考えすぎちゃうの？」と龍驤は楽観的に取るが、鳳翔も大樹も木曽の意見を真っ向から否定する根拠が見つからなかった。
「諸君の見解はわかった。しかし、現状は窮しているのも事実だ。彼女が信用に足るかどうかは置いといて、立て直すまでの戦力が我々には必要なのだ。彼女の説明に虚偽があったとも思えない以上、危険ではあるが彼女を受け入れよう」
「賛成！」

「司令官の決定だ。意義はない」
「私もありません」
「……」
３人は大樹の決定に肯定するが、木曽だけは納得することができなかった。
奴は何か隠している。そう確信があったからだ。

単冠湾鎮守府3

応接室から退出したシュヴァンフヴィードは鎮守府内から外に出て、内火艇が停泊している桟橋に行かず湾岸にある施設に足を運んだ。

辺りは空襲を受けた倉庫の屋根に大きな穴が開き内部は黒焦げている。地面に落ちた爆弾でコンクリートの破片がそこら中に散らばっているのを妖精たちが一輪車やシャベルを使って片付けている。

ちらちらとこちらに視線を向けてくるが、合わせようとすると慌てて反らして作業をする。

そんな視線を気にせず、シュヴァンフヴィードの視線は施設から停泊している艤装に向けられた。

そこには無残にも黒く歪んだ鉄の塊の空母が存在した。

恐らく、ル級1の言っていた目標にされた空母なのだろう。

船側に「カガ」と煤くれた白文字が記されていることから、日本の正規空母加賀の艤装だとわかる。

沈没こそしてないものの、艦橋は破壊され、右に傾き甲板に大穴が何か所も空いて当時の苛烈な空襲を物語っている。

周辺の海面には、艦載機の残骸らしい緑色の翼の破片浮いている。

他の空母も同じくらいの状況で、見るに堪えない。

「ひっどいもんやろ。ボコボコに叩かれたからなぁ」

振り向くとそこにはちんまりとした少女がいた。

確か、応接室に入ってきた艦娘であり、初めに質問してきた艦娘だ。口調も独特の方言だからシュヴァンフヴィードの中では一番印象に残っていた。

「貴女は確か……応接室の…」

「そういや名前言うってなかったな。うちは龍驤。鳳翔と同じ軽空母の龍驤や。よろしゅうな」

「私はシュヴァンフヴィードこちらこそよろしく」

にかっと白い歯を見せ笑う龍驤。シュヴァンフヴィードは右手を差し出すと快く握りしめた。

「見てみい、うちの艤装も丸焦げ。幸いなことに司令部に居たからよかったものの、加賀と蒼龍は意識が戻らへん。艦載機の皆も多くが戦死してな……慢心って言うほどじゃないけど、流石に堪忍してほしいわ」
　けらけらと笑いながらもその表所には悲愴な面もちである。
「深海棲艦の接近を察知できなかったんですか？」
「電探には反応がなかったやから、恐らく低高度を進んできたんやろ。襲撃は明け方時で迎撃機が上がる前に空母艤装３隻に戦艦艤装２隻を炙ってトンズラやからな。徹底した作戦んなんやろ」
「敵の目的は何だったんでしょう？　空母と戦艦だけを襲撃するだけだなんて」
「恐らく、やっこさんはここが欲しいんやろ。厄介な空母と戦艦だけを叩いたのはその為や。ここを取れば本土進攻の前哨基地にできるからな。現に基地施設に被害が殆どないしな」
　確かに龍驤が言う通り奇襲にしては目標が限定していた。
　ル級１の言う通り徹底した作戦行動と言うのは間違いではなかったようだ。ということは近いうちに深海棲艦の再度も襲撃が差し迫っているのではと考えるべきだ。
「なら遠くない内に本格的な襲撃があるのでは？」
「……せやろな。航空機は鳳翔の３０余機に防衛機の零戦１０機。心もとないはないがこれで耐えるしかあらへんしな」
「撤退は考えないのですか？」
「撤退？」
　その時、龍驤の表情が怒気を含ませるものに変わった。
「ええか。うちら日本帝國海軍は逃げたりしなへん。例え負け戦であっても奴らに尻尾巻いて情けなく帰るんやったら最後まで戦って死ぬん。それが日本帝國海軍や」
　艦娘としての、兵器としての誇りが入り混じった瞳は、真っ直ぐにシュヴァンフヴィードを睨む。
　多くの乗組員を失い、戦友を傷つけられた彼女にも意地があった。
「それにな……加賀と蒼龍はうちの教え子みたいなもんなんや。せや

から一矢報いないと気が収まらへんねん」
帽子を深く被り、俯きながら龍驤は言う。
今の発言は不謹慎であったとシュヴァンフヴィードは後悔した。
「不謹慎な発言をお詫びします、申し訳ありませんでした」
「ええよ。ええよ。君が言ってることは現実的に正しい。うちもそれが最善やと思う。けど、ここの戦略的な価値は大きいから仕方ないねん」
北方の守りである単冠湾鎮守府を失えば、周辺の島々の千島列島から北海道北端を実質上の制圧下に置かれてしまう。
そうなれば広大な北海道の地に上陸する深海棲艦を向かい撃つ為の戦力の分布は広大になるからだ。
「せやから、単艦で航空戦闘群を殲滅した君には期待してるで！」
ぽんっ背中を押す龍驤に「ご期待に応えるように善処します」と礼儀正しく模範的に返す。
「かったいな～、もっと気軽に「わかった」ってぐらいでええよ。うちらと君はもう戦友なんやからな」
「わかった。期待に応えるように頑張る。龍驤」
「そうそう。そんな感じに気軽に行こうか、シュヴァンフヴィードはん！」
両者は笑い、握手を交わす。
「せっかくや。親睦を深めるために宿舎行って皆で飯食おうやないか？」
「そうですね。ついでに案内をしてもらえば助かります」
「よっしゃ！　それならうちが案内してやるさかい。付いてきいや」
龍驤に手を引かれながら、シュヴァンフヴィードは宿舎へと歩き出す。
鎮守府のすぐ横にある木造2階建てで、コンクリートと煉瓦でできた鎮守府に比べるといささか劣って見える建造物が艦娘たちの宿舎である。
ここでは27人もの艦娘が苦楽を共に日々を過ごしている。
「ここの廊下の左右の部屋は駆逐艦と巡洋艦の子らの部屋や。基本1

部屋に４人で姉妹どうしになるようになってるんや。この上がうちらの部屋な」
廊下を進みながら龍驤は説明する。部屋の扉にはそれぞれの艦娘の名前が記された板が貼ってある。
中にはかわいらしく装飾されたものあることにシュヴァンフヴィードはくすりと笑った。
廊下を進む食堂と書かれたプレートが掲げてある開口部を潜る。
中からはいい香りが厨房から溢れて食堂内に漂っていた。
時間は１２時をやや過ぎて頃なのか、食堂内には大勢の艦娘が食事をしていた。
「あの人、誰ぴょん？」
「きれい……」
「かっこいいね、海外の艦娘かな？」
「あれじゃない？　湾内に居た白い艤装の」
龍驤と共に入ってきたシュヴァンフヴィードに気づいたのか食事の手を止めて視線を向ける。
全員の視線が集まった頃合いを見図り、龍驤は「みんなちゅうもーく」と手を叩く。
「うちの鎮守府に客人艦娘として来たシュヴァンフヴィードや。みんなよろしゅうな」
「シュヴァンフヴィードです。訳在ってこの単冠湾鎮守府にお世話になります。よろしく」
やっぱりそうかと納得する者、驚く者が殆どであるが、先に会っている長門、厨房に居る鳳翔、天龍、電、雷、響は普段通りであった。
ただ、１人……木曽だけは警戒心を強め、睨んでいる。
「皆も知ってるかもしれへえけんども、シュヴァンフヴィードはんは、湾内に来た白い艤装の艦娘や。うちらをボコってった深海棲艦どもを沈めてくれた恩人でもあるん。だからみんなもお礼を言っといてな」
龍驤の発言にどよめきが走る。
「マジだったんだ」

「すごいわね～」
「Спасибо（ありがとう）」
「ありがとうね！」
「すごいのです！」
どこからともなく鳴る拍手喝采に、シュヴァンフヴィードはむずかゆい感覚で頬を赤めるが1つ嘘をついていることにチクリと心が痛む。
この笑顔の前で彼女たちのことを話すか。仲間を殺した相手を旗下に入れていると？　そうなった時、彼女たちの笑顔は恐怖と怨嗟に代わり、私を疑い、最悪敵対することになるだろう。
そうなれば……作られるのは地獄絵図の他ならない。
「どないしたん？　急に顔を青くして」
気づかれてはいけない、シュヴァンフヴィードは咄嗟に、
「お腹がすいて死にそうなので……」
誤魔化しの嘘を吐いた。
「なんや。そうならそうと早ういわんかい！　鳳翔！　シュヴァンフヴィードはんに膳を出してくれや！」
「はい、少し待っていてください」
「ほなこっちにきいや」
龍驤に促され、椅子に座ると鳳翔の持ってきた膳が置かれる。
焼きたての塩鮭に、ホカホカのごはん。みそ汁のいい匂いが、食欲を掻き立てるように鼻孔を刺激する。
添え物のお浸しも鮮やかな色合いで見る楽しみもある。
「ささ。遠慮なくたべてぇな」
「……」
しかし、出された膳と睨めっこするシュヴァンフヴィード。
「どないした？」
「あの……フォークかスプーンを」
どっとその時一番の笑い声が食堂を彩った。1人を除いて。

疑惑

食事をしながらシュヴァンフヴィードは鎮守府の艦娘たちと談笑をしていた。

その多くは質問のであるが、いやな顔を1つせずに丁寧に答える彼女に好印象を受けていた。

「ええっ！　じゃあ帰る場所がないのかぴょん!!」

シュヴァンフヴィードの現状に驚く卯月に「はい」っと落胆気味に答えた。

「私の祖国はこの世界にはありません」

「それは悲しいぴょん……だからうーちゃんが慰めてあげるぴょん！」

「ぷっぷくぷー」と持ち前の一発芸を披露する卯月に「いや、ダメやろ」と的確な突っ込みをかます。

「……10点」

「相変わらず弥生は厳しいね」

「だねぇ～」

同じ姉妹艦の弥生は不機嫌そうに、皐月は苦笑いを、文月は楽しそうにニヤける。

「みんなでうーちゃんをいじめるなぴょん」と卯月は頬を膨らまれる光景に、ふふっとシュヴァンフヴィードは口元が緩む

「ねぇねぇ、シュヴァンフヴィードさんはいつまでここにいるの？」

「それは……わかりません。ですが突然いなくなることはありません」

「ほんと？　だった今度あたしたちと遊ぼうよ～」

「こら文月、客人艦娘にあまり無理を言ってはいかん。遊びならこの長門が――」

「ええ～だって長門さん遊ぶの飽きたんだもん」

「なん……だと……」

ガーンと明らかに落ち込む長門。シュヴァンフヴィード以外の全員が「仕方ないよ」と諦観の視線を送る。

「ちょっといいか？」
振り向くと、そこには眼帯をした少女が威圧的な瞳で立っていた。
駆逐艦の子並みの慎重に水兵のようなデザインのセーラー服の上に黒のマントを羽織、同色のブーツにグローブ、白の軍帽。
腰に軍刀を差し、それは軍人より、海賊を彷彿？させる。
眼帯も天龍とは違い右になっているもの特徴だろう。
「俺は木曽だ」
「私はシュヴァンフヴィード」
「知ってる。さっき応接室であったからな」
木曽の言うとり、応接室で対面し、シュヴァンフヴィードの中で２番目に印象に残っていた艦娘だった。
大樹を含む４人の艦娘の中で、唯一敵意の眼差しを向け来ていたからだ。
「それでなにか？」
すっと隻眼が細められる。
「あんた言ったよな。単艦でここを襲撃した連中を殲滅したって」
「ええ」
「証拠は？」
「はあ？」
「聞こえなかったか？　一体どうやって敵艦隊を殲滅したっていう証拠がある？」
「……」
シュヴァンフヴィードの沈黙に「はっ、そうだろうよ」とわざとらしく両手を上げ、大げさに振る舞う。
「証拠はあんたの中だけ。鳳翔さんの艦隊が接触したのはその後だ。あんた以外に見たやつはいない。そうだろう？」
より一層の殺意を持った隻眼がシュヴァンフヴィードを睨む。
「木曽！　シュヴァンフヴィードに失礼だぞ！　訂正しろ！」
「せや！　その言い方はあらへんやろ！」
「なら、こいつが深海棲艦のスパイでない証拠はなんだ？　同じ艦娘だからか？　存在しない国の？　俺はこいつが何かを隠していると

思うがね」
「……」
　表情にこそ出ないが、シュヴァンフヴィードの動悸が速くなり、額には冷や汗が浮かんでいた。
「わかりました。木曽さんの言う通り私は嘘をついていました？」
　観念したように立ち上がり、瞳を閉じる。
「嘘だと？」
　長門は目を見開いて驚く。
「それ見ろ、やっぱりこいつは奴他のスパイなんだ!!」
　木曽は軍刀を抜き、刃をシュヴァンフヴィードに向けた。
「なんや……シュヴァンフヴィードはん……嘘って？」
「それは……」
　閉じていた瞳を開き、困ったように微笑む。
「実は、私の艦には無人偵察機がありまして」
「無人……偵察機？」
　オウム返しのように聞く木曽に頷く。周りの龍驤たちも顔を見合わせる。
「名をメーヴェと言います。全長は７メートル。全幅１３メートル。航続距離約３０００キロメートル。上昇限界高度は８０００メートル。無線誘導で安全に偵察ができる優れものです」
「それがなんだ？」
「偵察機……無人ですので搭乗員の視界はありませんが遠隔操作で得た映像は記録しています」
「映像？　それが何だと言う？良い？んだ！」
「わかりませんか？　映像記録にしっかりと空母と戦艦、駆逐艦の撃沈映像が映っていると言っているんです」
「っ?!」
　驚いた木曽を見て意地悪く笑みを浮かべる。メーヴェのカメラセンサーが写した映像は本体のメモリーに記録されている。
「無人の偵察機……そんなものまであるのか」
「はい。隠していたことは謝罪します。機密に該当する兵器ですの

で」
　勿論嘘である。
「もし、疑うのであればそれを三島司令官とここにいる全員で観覧していただき判断していただきたいのですが？」
「……いいだろう」
　木曽は軍刀を収めると踵を返して食堂を出ていく。
　場の緊張した空気が緩み、見ていた全員がホッと胸を撫でおろす。
「すまんなシュヴァンフヴィードはん。うちの木曽が失礼なこと言うて」
「いえ。疑うのも当然。襲撃があり、示し合わせたように襲撃した艦隊を殲滅した不明の艦娘が現れる。しかも単艦で……信じられなくて当たり前です」
　そしてなにより、まだ話していないことに、後ろめたさがあるのは真実であるから尚更だと、シュヴァンフヴィードは内心で嘆息する。
　ともあれ、これで当分は疑われずにいられるのだろう。
　しかし、このことを副長にどう言おうか考えるのであった。

「はあ、それは災難でしたね」
　本体（船体）？ここは表現に疑問が艤装の意味を考えるとおかしいのでに戻ってきたシュヴァンフヴィードに副長は事の成り行きを話と苦笑いをする。
　他人事のように言う彼女にむっとなる。
「それで、彼女たちを映してあるところを消去することはできる？」
「私には何とも。そういったものは整備長の方が詳しいと思います」
　確かに、メーヴェの整備を担当しているのは彼女であるし、自分達よりよっぽどこの手の事には詳しいだろう。
　それよりの忠犬のように待って居るはずの２人の姿がないことに気づく。
「彼女たちは？」
「ああ、食堂です。ここに居てもやることがないようなので、補給長の

手伝いに向かわせました」
「よく言うこと聞いたね」
「はい。最初は渋りましたが「かんちょーが誉めてくれるかもな～」と言ったあさっり飛んでいきましたよ」
「……そう」
　なんてちょろいのだろうか。自分のためなら死も惜しまないんじゃないだろうかとシュヴァンフヴィードは嘆息する。
「それじゃ整備長に会いに行ってくる」と副長に告げエレベータに乗り、1階まで降り通路を歩く。本来なら通信機呼び出せばいいのだがル級1たちを見て行こうと思い立ったからだ。
　食堂に入り厨房を覗くと……。
「おい、ジャガイモの皮むきはまだ終わらないのかい?!」
「ハ、ハイ！　モウ少シデ出来マス……」
「遅い！　あんたたち2人のせいで全体の調理が遅れるんだよ！わかったら手を動かしな手をっ!!」
「「ハ、ハイィイイ!!」」
「それが終わったらニンジンの皮むきを頼むよ」
「マ、マダアルノカ?!」
「仕事なんていくらでもあるんだよ！　わかったら手を動かす!!」
「「ソンナアァァァ!!」」
　……うん、見なかったことにしよう。シュヴァンフヴィードは気づかれないように食堂を後にした。
　恨むなら抜擢した副長を恨んでくれと格納庫に?がる通路を進みながら、心中で合掌した。

　格納庫に付くと、整備員たちは職務の艦載機の整備に汗を流していた。
　ちょうど整備長はクレーベの整備監督をしているのをシュヴァンフヴィードは見つけた。
「整備長、今いい?」

「かんちょー殿！　如何御用でしょうか？」
　先の戦闘の偵察映像を公開することと一部削除ができるかを尋ねると、整備長は「できますよ」といいながらメーヴェのカメラセンサーをいじり、内部からメモリーチップを取り出し、ノートＰＣに差し込むと
　画面に映像が映し出された。
「こちらに全て記録されています。彼女たちの船体？が爆沈したとこまでその後の映像データを削除するでよろしいですね？」
「お願い」
「わかりました」と、映像を早送りにして、爆沈のしたところで映像を止める。整備長はキーボード叩き「削除しました」と画面に表示された。
「これで大丈夫です。映像はこのノートＰＣで見てくださいね」
「ありがとう」
「お安い御用です」
　渡されたノートＰＣを受け取り、シュヴァンフヴィードは急ぎ足で格納庫を出た。

姉妹

戦闘記録を収めたノートＰＣを持って、鎮守府の食堂に入るとすでに三島大樹少将と大淀が席に付いていた。
テーブルにノートＰＣを置いて開く。
「こちらが戦闘映像になります」
「拝見させてもらうよ」
シュヴァンフヴィードがキーを叩くと映像は流れ始めた。
端末が小さいことから自然と大樹の後ろに扇状に集まり、ノートＰＣの画面を凝視する。
「見て見て！　映像に色が付いてるよ！」
「鮮明で……綺麗」
「あ、小さく見えるのが敵艦かな？」
「うーちゃんにも見せるぴょん！」
「静かにせんかい！　聞こえないやろ」
卯月たち駆逐艦は背が小さいことから１番前に陣取りながら戦闘の映像を観覧していく。
「お、空母から艦載機が飛び立ったな」
「数は……３０機かしらねぇ」
「鳳翔さんが言った通りの数だね」
「あわわわわ、大変なのです！」
「大丈夫、記録映像なのだから」
数秒後、シュヴァンフヴィードから放たれた多目的ミサイル３本がヲ級に命中。２本が船側に、１本が艦橋を吹き飛ばした。ヲ級の艤装は炎上して爆沈した。
「あ、あれが言うとったみさいるかいな?!　ほんまぶっ飛んどるな！」
「ああ、相手にとっては何が起きたかわからぬまま沈んだのだろうな。恐ろしいものだ……」
この鎮守府のつわものである龍驤と長門も流石に驚愕を隠せないでいた。
映像は変わり、ル級１との砲撃戦を映す。艦載機迎撃する映像は、

キャニスター弾の誤射を避けるために残念ながらない無いが致し方ない。
「なっ！　砲弾が命中したのに無傷？　どうなっているんだ?!」
「それは重力電磁障壁と言う防御装置です。詳しくは機密に付き申し上げませんが、見ての通り１６インチの砲弾数発ではびくともしない防御力を誇ります」
「そして、ル級を一撃に沈める威力の巨砲。一斉射での全弾命中させる精度の高さ――シュヴァンフヴィード……君は本当に怪物のようだな」
畏怖の念で大樹はそう言う。
が、本当の化け物は自分から生まれた物を差すのだろうとシュヴァンフヴィードは考える。
試作として小型された超兵器機関を搭載され、従来の艦を凌駕するが、その後の妹たちは遥かに凶悪な戦闘力を誇るのだから。
そして、映像はル級１，２の艤装が爆発して間もなく途切れた。
ノートＰＣを閉じると、シュヴァンフヴィードは木曽に向き合う。
「以上が、私の戦闘記録。これで信頼して欲しいとは言いませんが、貴女が言う疑惑は晴れましたか？」
「……ああ。いい加減なことを言ってすまなかった」
頭を深く下げて木曽は謝罪する。
案外、悪い娘ではないのだろう。彼女も大樹と共に自分に立ち会った艦娘。それなりに信頼されており、今回の疑惑もここにいる皆を守るための正義感からの行動なのだろう。
「いいえ、私こそいろいろと隠してしまってごめんなさい。軍事機密は同盟国であっても公開することは許されないものですから」
「次世代戦艦の試作艦と言っていたね。その辺は承認しよう。しかし最低限、君の艤装の詳細を明かしてほしい。いいかね？」
「はい、後日にスペックをまとめた資料を提出します」
「結構だ。では解散とする。全員次の命令があるまでは英気を養うように」
食堂を退出する大樹に全員が敬礼をした。

「ねぇねぇ～シュヴァンフヴィードさんの艤装にはどんな武装が搭載されてるの？」
「うーちゃんも気になるぴょん！」
「みさいるってどんな兵器なの？　僕らにも搭載できる？」
「私も……気になる」
「駆逐艦にもミサイルは詰めますが大掛かりな改装が必要となります」
「本当かい！　僕たちも空母を一撃で沈められるの?!」
　はい、頷くと皐月たち駆逐艦は衝撃を受けた。非力な自分たちでも敵空母を沈められる可能性に沸き立つ。
「マジかよ。そうなれば単艦で艦隊を殲滅することなんて簡単じゃあねえかよ！」
「そうよねぇ。流石に驚くわぁ」
「他にも対艦だけでなく、対空、対潜用のミサイルが存在します。これにより単艦であらゆる状況に対応することができます。私の国の次世代戦艦の構想はどの状況にも対応できる汎用性を重視していました」
「まさに一騎当千か……戦艦の私としては羨ましいと思って仕方ないよ」
「他にはどんなものがあるの？」
「主砲が５１センチ５０口径連装砲２基。副砲は１５．７センチ６０口径連装砲４基。１２．７センチ６５口径連装両用砲８基。近接防御用４０ミリ６砲身ガトリング砲８基全てが自動制御できます」
「え？　手動じゃないのですか?!」
「はい」
「実にＸＯＰＯⅢＯ（ハラショー）だ」
　次々と質問されるがシュヴァンフヴィードは答えた。収拾が付かなくなる前に「ほな。今日はここまでや。シュヴァンフヴィードはんも疲れているんやからな」と龍驤が逃げ道を作ると、駆逐艦の娘たちは名残惜しそうに頷くと食堂を後にし、それが合図に他の艦娘も散らばっていく。

シュヴァンフヴィードもノートＰＣを持って食堂を出ようと歩き出すと木曽が立ちはだかる様に開口部に立っていた。
先程と違い威圧的な感じはしない。
「なにか？」
「いや……まだ礼を言ってなかったと思ってな……ありがとう」
木曽はそれだけ言うとシュヴァンフヴィードに背を向け、廊下を進んでいく。最後の部分が聞き取れなかったが、恐らく「ありがとう」と言われたのだろうとシュヴァンフヴィードは微笑む。
「まったく素直じゃやいんやから」
隣に来た龍驤はケラケラと笑う。
「ま、悪い奴じゃないんよ。仲良くしてやってな」
「わかった。そうする」
「よろしくな」と龍驤は手をひらひらと振りながら廊下を歩いていく。
宿舎から出で内火艇に戻ろうとシュヴァンフヴィードは桟橋を目指して歩いていく。
太陽は水上戦に半分沈み、海面が茜色に染まっている。自身の艤装も夕日を浴びて、神秘的な輝きを放っていた。
桟橋に着くと、待たせていた内火艇に乗り艤装へと静かな湾内を進んでいく。
艤装の後部の搭乗口？に着くと、そこにはル級1，2の2人がやつれた表情で待って居た。
「オ帰リナサイ、シュヴァンフヴィード旗艦」
「ただいま」
タラップを上がると2人は敬礼する。
「貴女たち2人も補給長手伝いご苦労さま」
「ッ！　ゴ存ジデシタカ……」
「副長から聞いた。よく手伝ってくれたね、ありがとう」
「イ、▪イエ。旗艦デアル貴女ノ為ナラ喜ンデヤリマス！」
嬉しそうに答える姉にル級2はため息を吐く。
「ネエサン、最初ハ渋ッテタ癖ニ、旗艦殿ニ誉メラレルト妖精ニ言ワレタ途端、張リ切ッチャウンデスヨ……」

「イ、言ウナル級2!!」
顔を真っ赤にして俯くル級1にふふっとシュヴァンフヴィードは小さく笑うと右の手で彼女の頭に手を置く。瞬間、ル級1がはじかれた様に顔を上げる。
真っ赤な顔がさらに赤く染まる。
「それでも手伝ってあげてありがとう。でも、私の為だからって命を粗末にすることは許さない。わかった」
「ハ、ハイ!」
撫でながらそう言うと、尻尾を振る子犬のようにル級1は頬を緩ませる。本当にわかっているのだろうか?
「……」
「貴女もありがとう」
「ン……アリガトウ御座イマス」
妹のル級2の頭を撫でると気持ちよさそうに目を細める。余程気持ちよかったのか止めると2人は物惜しそうに瞳を潤ませた。
そう言えば彼女たちの名前はどうしようかとふと思う。いつまでも名称のル級ではややこしいし、1，2と番号で言うのはあまりにも酷だと良心が痛む。
そうだ、こうしよう。
「唐突だけど貴女たち2人を姉妹にしようと思うの」
「エ?!」
「いつまでもル級じゃ深海棲艦のまま。私の旗下なら相応の名がいると思うの」
2人は互いに顔を見合わせると嬉しそうに頷く。
「姉の貴女は、ランドグリーズ。妹の貴女はラーズグリーズとこれからは名乗って」
「ランドグリーズ……」
「ラーズグリーズ……」
2人は咀嚼するように呟く。すると瞼から涙が溢れぽたぽたと床に落ちていく。流石のシュヴァンフヴィードも驚きを隠せなかった。
「い、嫌だった?」

「イエ、凄ク嬉シイデス！　旗下ク加エテ頂イタダケデナク、貴女の妹ニシテモライ名前マデ貰エルナンテ……アリガトウ御座イマスッ!!」
「私モネエサント同ジデス！　本当ニ嬉シイデスッ！　アリガトウ御座イマス!!」
２人は心底嬉しそうに笑う。ホッと息を吐くと、シュヴァンフヴィードは２人を抱き寄せる。
突然のことに２人は固まる
「姉妹になったのだから敬語はいらない」
「シカシ……」
「命令――ううん、姉としてのお願い」
「ワカ……タ、オ姉サマ」
「ハイ、オ姉サマ」
２人は誓うようにシュヴァンフヴィードを強く抱きしめた。

性能

ランドグリーズ、ラーズグリーズの2人と別れシュヴァンフヴィードは格納庫に向かい整備長から艤装性能を記した資料をもらい受け、艦長室――自室に入りまとめ直す作業に取り掛かる。室内は簡素なベッドに机があるだけで艦長室と言え、豪華さがないと思われるが客船でなく、戦う艦であるための性だろう。机に着くと資料を広げる。

ウィルキア王国が存在しないことと、艤装内の武装仕様でだいぶ驚いていたことからこの世界の艦娘の艤装の性能は自分がいた時代より数十年前の性能だと考えられる。

全ての性能を熟知されてしまうと拿捕され、隅々まで解体、残骸にされかねない。そうなってしまえば拠り所をなくしてしまうどころか日本帝國を敵にしなければならない。

ただでさえ、知らぬ世界に転生して祖国がないだけでなく、同盟国の国と矛を交えるのはシュヴァンフヴィードの望むことではない。

しかし、映像を見せてしまったことである程度の性能を提示しなければ不審がられる可能性もなきに非ずだ。

修正箇所は主に、一部搭載武装と機関に関するものである。

次世代試験戦艦であるシュヴァンフヴィードには後に超兵器リヴァイアサンに搭載された大型特殊弾頭ミサイル「グングニル」の試作型の特殊弾頭ミサイル「レーヴァテイン」が搭載されている。

これはいわゆるナパーム弾頭ミサイルであり、猛烈な化学反応を起こし、爆破点を中心とした広範囲を焼き尽くすものだ。

前世でも帝国派は紅海艦隊に使用し味方艦隊と基地を巻き込み全滅させた。まさに悪魔の兵器であるが廃棄してしまえばそれほど重要視するものでもない。

問題は2つ目の機関である。

シュヴァンフヴィードは表向き次世代戦艦の試作艦で通っているがその実、超兵器戦艦の性能実証艦という二つ名を帯びている。

その為、彼女の機関が小型ではあるが超兵器機関が内蔵されている。

この為、５６センチ全面防御であるにも関わらず、４０ノット近い高速を誇ると同時に莫大な電力を生み出し、重力電磁障壁を発生させることができるのである。
一通りまとめ上げたシュヴァンフヴィードは通信機で副長を呼び出す。
『こちら副長です。何でしょう？』
「ちょっと私の部屋に来てくれる？」
『今でありますか？』
「そう」
『分かりました。すぐにお伺いします』
副長を待つこと5分、扉が叩く音が3回鳴る。
「副長です。失礼します」
扉が開き、現れた副長は敬礼する。「入って」とシュヴァンフヴィードは促す。
「如何しましたかんちょー？　自室にお呼びになるなんて」
「ちょっとね。副長――貴女はこれで三島司令に提出したほうがいいと思う？」
シュヴァンフヴィードは書類を渡す。彼女を呼んだ理由は自分だけでなく、補佐官として、艤装を預かる者としての意見を聞きたかった為である。
「これは、艤装性能をまとめたものですね。大方の理由は察しましたが……」
「ふむふむ、なるほど」と読み終えた副長はシュヴァンフヴィードに視線を向ける。
「恐らくこれくらいなら大丈夫でしょう。万が一の為に砲雷長には「レーヴァテイン」の封印を進言しておきます。後は機関に関してはどうにもなりませんから新型ガスタービンにでもしておきましょう。幸いあれは煙を出しませんし。原子炉とか言うよりは説得力がありますからね」
「わかった」
「あとはですね――」

副長を交えて制作を再開。
互いに意見を出しながら提出する性能表を修正していく。
「重力電磁障壁装置は知られたけど、機密で何とか通ると思う」
「ならいいのですが、念のため資料を作っておきましょう。あって損するものでもありませんし。それから――」
制作は日をまたいで続き、朝方に完成した。
２人は睡魔に襲われ眠りに付き、目が覚めたのは昼を迎えてからだった。

正午、目覚めたシュヴァンフヴィードは昼食を食べ終えて、鎮守府の指令室に来ていた。大樹に性能をまとめた資料を渡すためだ。
３回ノックして「入れ」と中から声が聞こえたのを確認してから扉を開ける。
室内では大樹が執務机で書類と睨めっこしており、隣には大淀が束になった書類を持っている。恐らく、襲撃によりものなのだろう。
「うん？　シュヴァンフヴィード、君か」
「失礼します三島少将。艤装の性能をまとめた書類を提出しに伺いました」
敬礼して、執務机に座っている大樹に書類を渡す。
途端、大樹と大淀は目を丸くしてシュヴァンフヴィードを見る。
「これが……君の性能なのか？」
「信じられません」
「信じられないと思いますが、真実です」
「これなら多く見積もって３個戦隊以上の戦力を有しているのか。君が敵じゃないことを喜ばしいよ」
流石のつわものの大樹でも背筋が凍る気がした。一目見た時に感じた畏怖はまぎれもない真実であったからだ。
ならばと、大樹の中にある軍人としての性が、目の前の怪物艦娘の戦いぶりを拝みたいという衝動に駆られる。がそれを自制心フル活動で抑制する。ならば……。

「シュヴァンフヴィード。貴官に頼みがある」
「なんでしょうか？」
「君の艤装に、私を乗せてはくれないか？」
「司令官?!」
　隣で驚く大淀をよそに、大樹は真っすぐとシュヴァンフヴィードを見つめる。
「それは……艤装内を見て回りたいと？」
「いや、そんな無粋なものじゃない。我ながら幼稚だと思うが、好奇心とでもいう類のものだよ。あの艤装に乗ってみた……ただそれだけだ」
「ダメかな」と無邪気な子供の様に瞳を輝かせる大樹に大淀は額に手をつき深いため息を吐く。
　自分は彼の指揮下の艦娘ではないので断ることはできるが……いい歳をした大人がイエスと言ってくれるだろうと期待している瞳が、シュヴァンフヴィードを断れづらくしでいた。
「わかりました。艦橋内だけと約束してくれるのなら」
「わかった。約束しよう」
　シュヴァンフヴィードからは見えないが、机の下の手はしっかりと握られ、ガッツポーズを取っていた。
「それと自分の妖精たちを上陸する許可を頂けませんか」
「理由は？」
「艤装内の妖精の中には整備士が十数人います。私たちを受け入れてくれたことへのお礼とまでは言えませんが、艤装の修復作業の手伝いが出来れば幸いかと。炊事の人手も必要になるようならこちらも手配いたします」
「そう言ってくれるのなら助かるよ。こちらは工廠とドックをフル活動しているが人手が足りない状況だ。工廠には私から言っておくよ。技術人だけでなく、交流を兼ねて全員の上陸を許可するよ」
「ありがとうございます。では私は上陸の準備と指揮をしますので失礼致します」
　シュヴァンフヴィードは敬礼して司令室を退出した。

「上陸許可を出してよろしいのですか？」
「大淀は反対か？」
「いえ、司令がお決めになったことに意義はありませんが少々優遇ではありませんか？」
「確かにそうかもしれないが、これを読んでしまってはそうも言ってられないよ。間違えても敵にはしたくないし、多少の待遇は良くしないとな」
ふう、と息を吐き、手にした書類を机に置くと深く椅子に座り込む。
「本当に……とんでもない娘が来てしまったものだ」

大樹から上陸許可を受け取ると、桟橋ではすでにシュヴァンフヴィードの艤装からの内火艇数隻が接岸していた。
整備員だけでなく、全員の上陸を許可してくれ為、シュヴァンフヴィードは妖精たちに1日交代の方眩上陸を言い渡した。
まずは整備長をはじめとした技術人と、仮設炊事を行うために補給長含む数人を先に上陸させた。
「整備長たちは入渠した艤装の修復作業を行うために工廠に。補給長は仮設炊事所を立てて配膳の用意をして。三島少将の許可はすでに下りています。私たちを受け入れてくれた恩を返すように全力で答えて」
「了解です!!」
すぐさま内火艇から荷を下ろして、妖精たちはそれぞれの仕事に取り掛かった。

予兆

単冠湾鎮守府が襲撃を受けて3日が過ぎようとしていた。
飛行場、工廠などの施設の被害が少なかったことから、復興は容易に済んだが、被害にあった艤装の修復には難儀していた。
特に、大破した加賀と蒼龍の艤装でドックが2つ埋まり、撤去とドッグ修復に時間を割かれたことが大きな要因であった。
襲撃を受け疲弊している中、丸2日で使用可能に持ち込んだ彼女たち妖精には感服を禁じ得ないが疲労はピークに達しようとしていた。
既に、生きた屍同然の動きをしながら資材を運び込む姿が、痛々しく見えてくる。
整備長たち技術班は工廠に赴いた。中ではヘルメットを被った妖精たちが忙しなく資材を運ぶ音、金属が叩かれる音、バーナーの音で満ちていた。
「君、すまないがここの担当者は何処に居る？」
「え？　あちらにいる妖精がそうだよ」
整備長に声を掛けられた妖精は工廠の奥を指さす。
そこにはピンク髪を横髪だけおさげにし、セーラ服の妖精が、他の妖精に指示を出している。
「忙しいところありがとう」
「いえ、では急いでいるので失礼します」
妖精は資材を持って走り去る。
整備長たちは工廠内に足を踏み入れ、ピンク髪の妖精の下まで歩いていく。
整備長たちに気づいた妖精は一瞥すると、すぐに指示出しに戻る。
「ちょっといいか？」
「なに？　今は忙しいから手短に」
まるでその対応は相手にするつもりがないようだった。
「シュヴァンフヴィード艤装妖精の整備長だ。こちらを支援するために来た」
「知ってる。私は工廠長。しれーかんから連絡は来ているけど認可し

た覚えはないよ」
　工廠長は横目で整備長を見る。
「それはどういうことだ？」
「貴女たちの支援は嬉しいけど、これは私たちの戦争なの。部外者は足手まといになるかもしれないから支援は断ったわ」
「私たちが足手まといだと?!」
「よせ！」
　整備妖精たちは激怒したが整備長は彼女らをなだめる。
　彼女は足手まといになるそれだけではないと整備長は受け取った。
　恐らく、自分たちの助力を受けることが彼女のプライドが許さないのだろう。
「君の意見は判ったが、今はそうも言ってられないだろう。他の妖精を見たか？　疲労困憊で今に倒れそうだ。そうなってしまっては本末転倒だろう？」
「それは……そうだけど」
「なにも勝手に動こうとは思わない。ここの責任者は君だ。私たちは君の指示で動こう」
　しばらくの沈黙の後、工廠長は頷く。
「わかった。なら貴女たちは一番ドックの龍驤の艤装の修復をお願いするよ。一番損傷が激しいのとしれーかんから修復を急ぐよう言われているの」
「わかった。みんな指示は聞こえたな！　一番ドックにある艤装の修復だ。気合い入れていくぞ！」
「「おおっ!!」」
　整備長たちは一番ドックに向かって駆けて行った。

　一方、補給長たちは工廠の近くに、仮設テントを立て、炊事の準備に取り掛かっていた。
　今最も、食事による英気を養わなければいけないのは艤装を修復している妖精たちだ。その彼女たちの為にも、近くでの炊事は作業の効

率を上げる為の、シュヴァンフヴィードが考えた処置である。
「いいかい。みんな疲れてるから、塩をうんっと利かせな！」
「アイマム！」
彼女たちが作る料理はおにぎりである。日本の誰もが親しみを持っているものだ。
補給長は働く妖精に、手軽の精が付くものは何だろうと考えて末に、日本の戦闘配食のおにぎりがいいとひらめいたからだ。
そうと決まれば飯盒を集めるだけ集め、米を炊き、塩をこれでもかと擦り込みながらにぎっていく。汁物も具沢山の豚汁を用意した。
匂いにつられてなのか、仮設テントには行列ができていく。
「しょっぱッ！　でもうまい！」
「これならまだまだ頑張れるぞ！」
「うまい飯をありがとう！」
「まだまだあるからよく食べていきな」
疲れ切っていた妖精たちは笑顔になり、元気を取り戻していった。

遥か北方のアルフォンシーノ方面、キス島沖に異形の艦船集団、深海棲艦の姿があった。
先の奇襲の時とは違い、空母ヲ級ヨークタウン３隻。巨大な怪物の空母ヌ級が同じく３隻。戦艦ル級ノースカロライナ２隻。戦艦タ級サウスダコタ２隻、重巡リ級ノーザンプトン１隻。駆逐イ、ロ、ハ級１２隻、合計２３隻の大艦隊が停泊している。
先の少数での奇襲ではなく数に物を言わせた物量戦を展開するのだろう。
「ヲ級Ｆｌａｇｓｈｉｐヨリ全艦ヘ、コレヨリ単冠湾鎮守府ヘノ総攻撃ヲ行ウ。先日ノ奇襲ハ成功シ奴ラノ航空戦力ハ壊滅シタ。今コソ日本本土ヘノ橋頭保ヲ築ク時ダ!!」
高らかに演説するのはヲ級Ｆｌａｇｓｈｉｐと呼ばれる個体だ。
通常の個体と比べ、艦載機の動きが極めて鋭敏であることから恐れられている。

先の、奇襲作戦を考案したのも彼女である。
日本帝國の誇る艦載機「烈風」と「零式艦上戦闘機３２型」は正面から相手取るのには厄介な存在である。如何に数的な有利があっても、キルレート８対１では割に合わない。
ならばと、少数の艦隊での奇襲で相手の出鼻をくじき、本体である自分たちの艦隊で息の根を止める二の矢の作戦。
第一段階の奇襲は予想以上の戦火に満足したが、それっきり奇襲部隊との連絡が途絶えていたことがヲ級Ｆｌａｇｓｈｉｐに影を落とすも、これから起きる一方的な殺戮ショーを前の興奮がかき消す。
「全艦抜錨！　コレヨリ敵鎮守府ニ向ケ進軍する!!」
意気揚々と異形の軍団は錨を上げ、進行する。
目指すは、単冠湾鎮守府だ。

整備長と補給長の活躍によって、艤装修復の作業は飛躍的に向上した。
特に、大破状態の龍驤は僅か１日という短時間で航行可能状態まで修復が完了していたが残念なことに爆弾で空いた被弾痕を修復するには今しばらく掛かる。戦艦艤装は榛名と霧島が重症の為、戦線離脱を余儀なくされたことから、中、小破した駆逐艦艤装の修復を優先した。
近いうちに第二の襲撃があるだろうという大樹の軍人としての感がそう告げたからである。
「艤装の修復は大方完了しました」
「報告ご苦労大淀。これでせめてもの防衛戦力は回復したが、防衛機３０余機では次の襲撃は防げないな」
大樹は腕を組む。
「大本営は……なんと言われたのですか？」
「現在する戦力で戦線を維持せ、とのことだ」
「そんな！　大本営はこの場所の戦略的価値をわかっているのですか！」

「わかった上で言っているのだろう。安全な内地で私腹を肥やしている連中は最前線のことなんて他人事なのだろう。戦争が始まって20年、終わりの見えない戦いのせいで、軍部の腐敗は増すばかりということだ」
大樹の言う通り現在の大本営官僚の大半が前線へ行かずに、執務室の椅子で部下の報告書を読むか、無意味な閣僚会議に舌を使っている。
膠着状態の現在、内地の鎮守府、警備府では停泊して訓練ばかりの毎日を費やしていた。
実績と経験のある将校と艦娘は戦線に送られ、馬車馬のように使われては使い捨てにされている。内地の安全な椅子に座れるのは、軍学校を首席で卒業した優等生か、コネがある御曹司に限られていた。
そのため戦線への物資補給も横流しがあり、最前線では少ない物資をやりくりしている現状であった。事実、大樹の艦隊の艦娘は北方――アルフォンシーノ方面に侵攻して撃破した深海棲艦から回収した娘たちであり、設備、艦載機などの軍備増強も拿捕した艦艇を資材に変えて行っていた。
「我が艦隊は航空戦力を著しく損失した。が、それに見合う艦娘が手元にある」
「……そうでしょうか」
大淀は不安そうに俯く。シュヴァンフヴィードが提示した艤装性能は突拍子なものであり、にわかには信じられずにいたからだ。
「もし、彼女が私たちに提示した性能以下であれば……失礼ながらあまり頼りにするのは危険かと」
「大淀の言うことは理解できる。しかし君のあの映像を見ただろう？」
「はい……信じられない光景でした」
「私もだ。彼女は我々の常識を超えた存在だ。頼もしくもあるが、鳳翔が言っていたが危険でもある。だから……次の襲撃の時、彼女は単艦で出撃してもらう」
「!?　それではまるで……！」

目を瞑って頷く大樹を見て、大淀は続ける言葉を飲み込んだ。

出撃

整備班と補給班の第一陣が上陸を完了した。
桟橋には第二陣が次々と上陸してシュヴァンフヴィードの前に整列していく。
最後の班が上陸したのを確認したシュヴァンフヴィードは妖精たちに話し始めた。
「みんな、現在単冠湾鎮守府は襲撃を受けて甚大な被害があった。その中で上陸許可を出して頂いたことを鑑みて行動するように、以上」
「敬礼！」
ザっと妖精は一糸乱れない敬礼をして各班長の指示で動き始めた。
その行動は迅速。おそらく前もって各班に割り当てがあったのだろう。
そしてその指示を出したのは副長なのだろうと、シュヴァンフヴィードは部下の優秀さに出る幕がないと事の嬉しさと寂しさが入り混じった複雑な心情を感じた。
桟橋から艤装を眺めていると後部から艦載機のメーヴェが飛び立った。
近いうちに本格的な第二次攻撃に備えて周辺への偵察に飛ばすように航空機長に指示を出していたからだ。
しかし、発見できたからと言っても先制攻撃できるほどの戦力はない。鳳翔の艦載機は２０余機の内、艦戦１１機、艦攻７、偵察１である。鎮守府の迎撃機１０機を入れてもあまりにも数が少ない。
結局のところこちらからは手が出せず、防戦一方を強いられる形になっている。
戦術的不利を少しでも減らそうと、シュヴァンフヴィードは偵察機メーヴェの索敵能力で敵艦隊もしくは敵編隊を早期発見することで少しでも優位に立とうとしていた。
そうすれば自身単艦で出撃して敵艦隊または敵編隊の迎撃に向かうことができるからだ。
そうすれば、ここにいる艦娘たちと三島少将以下、多くの妖精たち

を救えるだろうとシュヴァンフヴィードは考えていた。
だが、裏腹に自身の性能を明るみに出すことになる。
今でさえ、映像や資料など三島らが判断する材料はない。直接的にシュヴァンフヴィードの性能を目にしてないから彼らも半信半疑だろう。しかし今度の襲撃を一人で打ち払ってしまえば半信は確信になるだろう。
そうなれば自分の待遇はどうなるのだろう？
今以上に優遇されるのだろうか？
それとも恐れられ拿捕されてしまうのか？
そうなればランドグリーズとラーズグリーズはどうなるのだろう……。
深海棲艦である彼女らは人類の敵、尋問の末最悪殺されるだろうか。
そうなれば自分は拘束されて徹底的に調べ尽くされるのだろう。
副長たちも同様に。
そうなれば――私はどうする？
「……」
「かんちょー？　艤装に戻られますか？」
「そうする。ここに居てもやることは無いからね」
桟橋から内火艇に乗り込む。
何れにせよ、遠くない未来に起こることだ。
そうなれば私は、私が最善だと思える選択をして進もう。
内火艇から鎮守府を見つめながらシュヴァンフヴィードは強く拳を握りしめた。

「航空機長よりＣＩＣへ。これより偵察行動に入る」
『ＣＩＣ……了解……』
艤装より飛び立ったメーヴェＩは１００キロ以上離れた海域で高度を６０００メートルに上昇して対空レーダーとセンサーカメラによる目視での索敵を開始した。

しかし、広大な海域を二機の偵察機でカバーをできるはずはなく、穴は空いてしまう。なにより時間的猶予が少ないことから航空機長は悪戯に進路を取るのではなく、来るであろう海域近くを二機のレーダー範囲ぎりぎりで平行に飛び網を張る偵察方法を取った。
「センサー員、レーダーから目を離すなよ」
「わかってます。機長こそ燃料に気を付けてくださいよ。いざ敵機と遭遇戦になった時、燃料がなかったら笑い話にもなりませんよ」
「ハッ。俺の腕なら深海棲艦の蚊トンボに撃ち落とされることはねぇよ」
「よく言いますね。まだ飛ばして二回目のくせに」
「お前も二回目だろう」
互いに軽口を言いながらも二人は索敵を続ける。
「メーヴェIからメーヴェII（ヅヴァイ）へ。初飛行の調子はどうだ？」
『やや東風が出てきましたが快調です』
「了解だ。無理せずにな」
『はい！』
二機の海鳥はそれぞれ別れ、索敵行動を開始した。

艦橋に戻ったシュヴァンフヴィードはランドグリーズとラーズグリーズ、副長と航海長の合わせた五人で第二次攻撃艦隊の予想進路を特定しようとしていた。
「ランドグリーズ。貴女たちの本体の規模はどれ位なの？」
「ハイ。空母ヲ級ガ三隻、ヌ級三隻、戦艦ル級二隻、タ級二隻、重巡リ級一隻、イ、ロ、ハ駆逐級ガ一二隻デス」
「計二三隻……空母機動艦隊ですね」
「旗艦ハ恐ラク空母ヲ級ｅｌｉｔｅ。コノ作戦ヲ提案シタ深海棲艦デス」
「ｅｌｉｔｅ個体ですか……」
副長は腕を組んで唸る。

深海棲艦には同個体であっても序列ある。
一般的に、通常、ｅｌｉｔｅ、ｆｌａｇｓｈｉｐに分けられ、それとは別に鬼、姫、水鬼（水姫）という個体も確認されている。
後者に行くほど脅威度は上がっているが、鬼、姫、水鬼（水姫）と言った個体は内地の奥深くに潜んでいる可能性が高く、先兵としてくるのは通常のイロハニホヘトチリムルヲと識別されている個体群である。
「私タチハ奇襲後直グニ連絡ヲ入レテ合流スル予定デシタ。場所ハコノ海域デス」
ランドグリーズが海図に示した場所はシュヴァンフヴィードと接敵した海域より東側に２０キロの辺りであった。
「この位置からなら第二次攻撃も北側からになりますね。襲撃完了時に連絡を入れてこの規模の艦隊となると……位置によりますが最悪一週間ですか」
「本体ハ前持ッテキス島ニ集結シテイマシタカラモット早イデス」
「キス島……２５ノットで進行するなら最悪今日か明日のどちらかですかんちょー」
「副長、直ちに航空機長にこの海域の付近を徹底的に監視するように伝えて。それと出港準備を」
「直ちに。ですがたった今陸に上がった乗員を収容すれば時間的なロスになりますが」
「最低限の乗員だけでも戦闘は行えるし、なにより一個空母機動艦隊だけならそれで十分」
「「エ?!」」
流石にランドグリーズとラーズグリーズはシュヴァンフヴィードの言葉に驚くが副長は「そうでしたね」と肩を竦めた。
「マサカ、オ一人デ……イクラオ姉サマデモソンナ」
「ソウデスヨ！　無謀スギマス！」
動揺する二人にシュヴァンフヴィードは、
「この程度の敵に屈するのなら一国を背負う戦艦で居ることなんてできない」

そう言い放ち、艦長席に座ると艦内通信機のスイッチを押した。
「艦長より全乗組員に通達。これより本艦は敵の第二次攻撃部隊の迎撃に向かう。一部乗員が陸に上がっているが、事態は一刻を争う。そのため一部乗員が欠如するけど皆ならその間を埋めることができると期待している、以上」
「出向用意！　抜錨！」
艤装は錨を上げて、機関の出力が上がっていくのをシュヴァンフヴィードは感じられた。
「反転１８０度。湾内より出たところで進路を北北東へ」
「了解です！　バウスラスター起動！　反転１８０度回頭後に第三戦速で湾の出入り口に向かいます！」
いつも以上に張り切っている航海長は舵を握る。
艤装は前後部バウスラスターによりその場で時計回りに回転後、速度を上げて太平洋に側に向かう。
『かんちょー……三島少将から……通信です』
「繋いで」
『……はい』
『こちら三島だ！　シュヴァンフヴィード！　君はどこに行こうというのだ！』
繋がれた途端、三島の慌てた大声が鼓膜に響いてシュヴァンフヴィードは体を少し傾けた。
「愚問です三島少将。本艦はこれより襲来するであろう第二次攻撃艦隊を迎撃に向かいます」
『どういうことだ？　まさか敵はもう来たのか?!』
「いいえ。偵察機を飛ばして索敵をしていますが敵の襲来はまだです。が、時間的に見ても敵はすぐそこまで迫ってきています。敵の進路はおおよその見当がついています。失礼を承知で言いますが、湾内に居るより自分が出撃をして迎撃する方が被害を少なくできると考えたからです」
『しかし……いくら君が客人艦娘であっても勝手が過ぎるぞ』
「勝手は承知しています。ですがそちらの現戦力で正面から決戦を行

えば全滅は必然。ならば活路を開くために貴方は私を使うべきでは？」
『っ……シュヴァンフヴィード……君は……』
　しばらくの沈黙にシュヴァンフヴィードは三島の心中を大方察した。遅かれ早かれ自分は単艦で出撃していただろう。体のいい囮として。別にそのこと自体、シュヴァンフヴィードは気にしていなかった。なぜなら自分でも恐らくそうしたであろうと思いつく非情さがあったからだ。それでも三島と言う人物はその非情な命令を喉のすぐそこまで来ているのに言い出せない優しさがあることに人として常識人なのだろう。しかしそれは時に決断を鈍らせる要因でもある。
「三島少将、私は客人艦娘です。貴方の指揮下にありますが正式なものではありません。この状況を打開するための最善の選択をしてください」
『……わかった、出撃を許可する』
「ありがとうございます」
『だがこちらの艦娘5人を連れて行ってくれ』
「それは……」
『現状こちらが出せる最大限の戦力だ。せめて……これだけでも連れて行ってくれ』
　重苦しく三島が言う。
　この援助は恐らく贖罪から来たものなのだろう。逃げない為の監視だとも考えられたが、乗員を陸に残してあるため後者はないだろうとシュヴァンフヴィードは思う。そしてちょっとした厄介を押し付けられたことに頭を悩ませる。
「わかりました。湾外で合流します。もしもの時は陸に上がった乗組員をお願いします」
『了解した。貴官の奮闘を期待する、そして必ず生還してくれ。以上』
　通信を終え深いため息を吐く。
「首輪ですかね？」
「多分違うと思う。図星を突かれたことの謝罪だと思う」
「根はいい人のようですね。裏表がない」

「そう思う。航海長、第二船速に減速して。後方から来る艦隊と合流する」
「了解です」

払拭への選択

湾内から出て数十分後、大急ぎで出てきた三島少将旗下の艦娘５人とシュヴァンフヴィードは合流した。

それは鳳翔率いる単冠湾第一艦隊空母戦闘群である。

『シュヴァンフヴィードさん！　やっと追いつきましたよ』

「鳳翔さん。まさか貴女の艦隊だとは思いませんでした」

『すぐに出港が可能で無傷の艤装は私たちだけですから』

「しかし、現状唯一の航空戦力の半数以上を引き裂いてもよろしかったのですか？」

『……正直に言って私は反対です。もしもこの出撃が空振りに終わりその間に鎮守府が襲撃される可能性の方が高い。戦力の分散は危険だと思いますがあの人の命令ですから』

「信頼しているのですね、三島少将を」

『はい。私だけでなく艦隊の全員が信頼しています』

「その一〇分の一でいいので信じて下さい。この方向に敵は必ずいます」

『……わかりました。信じます』

「ありがとうございます」

合流後直ちに陣形を組んだ。シュヴァンフヴィードを先頭に第一艦隊空母戦闘群、天龍、響、中心に鳳翔、後方に電、雷の輪形陣で進む。

艦隊は北東に進路を取り1時間、偵察行動のメーヴェⅡからの通信がシュヴァンフヴィードに届いた。

『こちらメーヴェⅡです。敵空母機動艦隊を補足しました。距離は母艦より２００、方位０―１―２です』

「映像を送信して」

『了解。映像を送ります』

シュヴァンフヴィードの網膜にメーヴェⅡからの映像が写される。眼下の海原を二十隻以上の船団が悠然と進軍しているのが映し出さ

れる。
　空母ヲ級ヨークタウンが三隻、異形な怪物の軽空母ヌ級三隻を中心に前衛に重巡リ級ノーザンプトン一隻、駆逐イ級三隻、戦艦ル級ノースカロライナが二隻、両翼に駆逐ロ級、ハ級が三隻、後衛に戦艦タ級サウスダコタ二隻、駆逐イ級三隻の輪形陣を成していた。
（下陣形図）

ロ　ロ　ロ
ル　　タ
イ　ヲ　ヌ　イ
リ　イ　ヲ　ヌ　イ
イ　ヲ　ヌ　イ
ル　　タ
ハ　ハ　ハ

　直掩機の姿がないことから先日の空襲の成功が余程の気の緩みを生んでいることがシュヴァンフヴィードには見て取れた。
　ヘットセットのオープンチャンネルを開く。
「船務長。鳳翔ヘ発光信号。「我、敵艦隊ヲ補足、敵ハ空母六、戦艦四、重巡一、駆逐一二、計二三隻カラ成ル、空母機動艦隊、シカシ直掩機ハ上ガッテ居ラズ、サレド、航空機ノ発進ハ待タレヨ、我、単艦デ向カウ、後方ニ居ラレタシ」方位と位置を伝えて」
『……了解』
「総員戦闘用意」
「はっ！　戦艦戦闘配置！　各員は所定の持ち場に付け！」
『ＣＩＣ……了解……全システム戦闘モードに移行。砲雷長、ウェポンチェック……』
『了解であります！　主砲、副砲、準備より。両用砲装填。ガトリング砲スピンアップ、異常無し、装弾完了。ＶＬＳ発射回路接続――戦闘準備完了であります！　空母機動艦隊でも何でも来い！』
『機関室準備完了。いついつでも戦闘に入れます』
『見張り員準備良し！』
「かんちょー戦闘準備完了しました。が、如何せ４割近くの乗員が居

ない為ダメージコントロールに支障が出ると思います」
「わかった。最低限の見張り員を残して残りをダメージコントロール要員に回して」
「了解です」
「メーヴェⅡは偵察を継続。もしも発見されて迎撃機が上がってきたら無理せずに退避して」
『メーヴェⅡ了解です』
「船務長、メーヴェⅠの現在位置は？」
『現在……メーヴェⅡの……海域に向かって……飛行中……』
「ありがとう。航空機長、貴女は周辺の空域の監視をお願い」
『了解！』
『かんちょー……鳳翔より返信……「了解シタ、シカシ、単艦デハ危険、思イ留マレヨ」以上……です』
「返信「気遣イニ感謝スル、我ガ性能ヲ、後方ニテ御覧在レ」以上」
『了解』
「船務長、速度を第三船速に」
「はい！　速度第三船速へ！」
　速度を上げ艦隊を離れ、シュヴァンフヴィードは敵空母機動艦隊へ直進する。
「ランドグリーズ、ラーズグリーズ」
　シュヴァンフヴィードは傍らにいる二人に声を掛ける。
「ハイ、オ姉サマ」
「何デショウ、オ姉サマ」
「二人にやってもらいたいことがあるの」
　二人はお互いに顔を見合わせた。
「ソレハ何デショウカ？」
「それは――」

　シュヴァンフヴィードが速度を上げて先行していくのを後方の鳳

翔は茫然と眺めていた。
『鳳翔さん！　いいのかよ先行させて！』
『天龍の言う通り。二〇隻の空母機動艦隊に一隻で挑むなんて自殺行為だ』
『そうよ！　早く止めないと鳳翔さん！』
『あわわわっ、シュヴァンフヴィードさんが危ないのです！』
だが既に、艦隊の速度の二倍にも及ぶ俊足でシュヴァンフヴィードは遠ざかっていく。
追いつけるのは駆逐艦の三人だけだが、そうなればこちらの対空防御戦力が不足して最悪丸裸の状態で攻撃される可能性があった。
鳳翔は小さく深呼吸する。
「皆さん落ち着いて聞いて下さい。彼女は「我ガ性能ヲ後方デ、御覧在レ」と最後に言って行きました。恐らくこの機会に私たちが内心で抱えている不安を払拭しようとしているのでしょう」
それは彼女が深海棲艦でのスパイであることだろうと四人は思った。記録映像を見てはいたが、正直彼女たちには現実味がなかった。表面上は納得したように振る舞っていたが、その内容はまるで映画の様に都合の良い物のようにも見て取れたからだ。そして何より彼女の進む方向に敵の空母機動艦隊の出現。
それは彼女が呼び押せたのでは？　私たちは誘い込まれたのでは？
鳳翔の脳裏にそう言った疑心が浮かぶが、そうならばわざわざ敵の方位と位置まで教えなく自分たちを襲撃させた方が理に適っているだろうと鳳翔はその疑心を振り払う。
自分の中でも彼女のことを信じられない部分がある。
それは認める。けど、彼女が鎮守府の為に乗員を割いて支援してくれたことは確かなのだ。そして何より――
――その一〇分の一で良いので私を信じてください。
「私たちは彼女の指示通り、このまま後方で待機します」
『鳳翔さん！　あんたっ！』
「天龍さん勘違いしないでください。私は彼女を見捨てはしません。

が、このまま直進したとしても彼女だけでなく私たちまでも危険な状態になってしまっては本末転倒です」
『確かにそうだね。戦力差は圧倒的に向こうが有利。けど直掩機がいないことや偵察機に発見されてないのならこちらか仕掛けてみるのも手だと思うよ』
『見つかってないことは有利に立っているわね。けど鳳翔さんの艦載機って二〇機在るかないかよね？　それって心もとない？』
「響さんの言う通り、発見されてないことと敵の位置情報があることは有利です。しかし私の艦載機は一九機の内七機の九九式艦爆機しか攻撃機はありません。奇襲を仕掛けるのにはあまりにも数が少ないです」
『ならせめて、護衛機をシュヴァンフヴィードさんに付けるのはどうですか？』
「それも一つの手ですが、もし敵の偵察機に発見された時に直掩機が無ければ制空権は相手に完全に掌握されて危険です」
『でも……このままじゃ……シュヴァンフヴィードさんが……』
　電は今にも泣きそうな声でつぶやく。
「……電さん。シュヴァンフヴィードさんは私たちが提督を信頼しているその一〇分の一でいいから信じてほしいと言いました……彼女が何の作戦もなく単独で先行することは無いと思います。だから信じてみましょう」
『……わかりました』
　しかし、だからと言って鳳翔は何もしないわけでない。すぐに自身の艤装妖精に指示を飛ばす。
「副長さん。偵察機をシュヴァンフヴィードさんの向かった方角に飛ばして。そして直掩機も出して対空警戒を」
「了解です。操舵手、艦を風上に変針！」
「ヨーソロー！」
　風上に感が回頭を終えると、すぐさま鳳翔の艤装の甲板上にある偵察機彩雲のエンジンに火が灯りプロペラが回転を始める。
「風向き……良し！　航空機、発艦してください！」

『彩雲２２号機、発艦します』
鳳翔の号令と共に甲板より飛び立った彩雲は、シュヴァンフヴィードの方角に旋回して後を追う。
続いて直掩機の零式艦上戦闘機二一型二機が発艦して艦隊の上空で敵偵察機発見に目を凝らす。
「副長さん。攻撃隊がいつでも発艦できるように準備をお願いします」
「わかりました」
「皆さん、私たちはこのままの速度を維持してシュヴァンフヴィードさんの後を追います。しかし、危険と見れば……遺憾ながら撤退します。対空警戒を厳に」
非常にも聞こえるが、鳳翔が第一に考えなければいけないのは艦隊の生存である。
『ちッ、了解したよ』
『同じく』
『了解よ』
『分かり……ました……』
四人は了承したが、その声音は暗かった。